
恋姫†無双 ～私だけを見てください～

マツト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋無双　～私だけを見てください～

【Nコード】

N4178V

【作者名】

マツト

【あらすじ】

少女は、愛しい人から選ばれなかった……そして、少女の愛しい人は他の女性と共に、世界から消えた。少女も消える最中、少女は他の女性達の事を恨み続ける事を、決めた……。
はわわ軍師の朱里ちゃんがチートになり、キャラも崩壊します。

第0話（前書き）

…いろいろと、書く事が多いですが…皆さん、お久しぶりです。（
はじめましての人が多いかな？）

マツトです。

さて、またもやこんな作品を思い付いてしまいました。

…まあ、取り敢えず見てってください。

それが私……

『朱里』の願いです。
……

第0話（後書き）

取り敢えず、朱里ファンの人…ごめんなさい！！（土下座）

私も、こんな酷いものを書いてどうしたことでしょう。

まあ、連載になっていきますがそんなにすぐには続きは書かないでしょう。（他の連載もあるし…）

まあ、またお会いしましょう。

第0・5話（前書き）

何だか話がスラスラ思い付いたので、早めに投稿します。

P・S 兄からPSPを貰い、真・恋姫＋夢想の蜀編をプレイしています。

第0・5話

……

……

……ここは……どこ？

辺りは真っ白で、他に居るのは私だけの世界……

私はあの世界で、光に飲まれて消えたはず……

そう、あの人……北郷一刀様が消えたことで、あの世界……外史が消滅したんです。

大好きだったあの人は……他の女と一緒に、また違う外史へと移ったでしょう。

……私が唯一大好きだった一刀様を奪った女……

……許さない……

……絶対に許さない……

私から大好きだった一刀様の事を、平然と奪った女を……

……許さない……

「……憎いですか？……諸葛亮孔明……」

「！！！？」

私の後ろから聞き覚えがある声がした。

それもそうだ……

声の持ち主は、私が他の女達と共に一刀様の為に戦ってきた相手……

ゆうなれば、一刀様の敵であつた……

……左慈と于吉と言う二人の導師だつた。

「…あ、貴方達は！？」

私は反射的に後ろに後ずさる。

「おやおや、心配せずとも大丈夫ですよ…もう私達の役目は終わりましたから、貴女とは敵対するつもりはありませんから……」

于吉と言う眼鏡をかけた導師が、軽々しく口にする。

「ふざけないでください！！そもそも貴方達がいたから、私の前からご主人様が……一刀様が消えたんですよ！！それなのに貴方達は『役目を終えたから、もう敵対するつもりはない』って、軽々しく言わないでください！！」

それにたとえ、貴方達に敵対をするつもりが無くても、私は貴方達の事を絶対に許しませんから！！」

そうだ、この二人が一刀様と奪った女が消えるきつかけを作ったの

だ。

だから、私はこの二人を許すつもりはない。

「心配をするな……今回俺達は、本当に敵対をするつもりはない。むしろ、お前の手助けをするために此処にきたのだ。」

今度は左慈と言う少年導師が口を開いた。

…えっ？この人達が、私の手助けを…どうして？

私が疑問に思っていると、于吉が口を開いた。

「貴女は、北郷一刀を奪った他の武将達に復讐をしたいと考えました……ですから、我々のように、復讐心を持った貴女に新たな外史に飛んでほしいのです。」

と、于吉が言葉を並べる。

「ちよつ、ちよつと待ってください！！……貴方達の目的は一刀様を殺す事だったはずですね。でも私が復讐をしたいのは一刀様じやなくて、それを奪った将達で、一刀様には全く復讐をする気なんて無いのにどうして手助けをしてくれるんですか！？」

私はもはや、二人の真理がよくわからずに、混乱をしていた。

すると、左慈が口を開いた。

「そんな事は、俺たちは知らん。……俺たちはただ、上の命令に従

つてお前の手助けをしるただけ言われているのだからな。」

「は、はあ……そうなん……ですか。」

「この二人の立場つて、一体……」そう思った私だったが、その事に
関しては、大して重要な事でもないので聞かないことにした。

「それじゃ……えっと、貴方たちがしてくれる手助けって何なん
ですか？」

そう私が聞くと、于吉さんが口を開きました。

「貴女にはこれから、貴女の居た外史と類似をしている外史に向か
つて頂きたいのです。…その外史は、貴女の知っているのとは異な
る北郷一刀が望んで作られた外史。…なので当然、北郷一刀も登場
しますし、貴女が目当てにしている武将たちもその外史には存在し
ます。我々がしてあげられるのは、貴女をその外史に送ることと…
…貴女自身の『同調』です。」

「私の…『同調』…？」

于吉さんの言葉が聞き慣れなくて、思わず首を傾げました。すると、
今度は左慈さんが口を開きました。

「『同調』と言うのは、俺たちの言葉で『一つの外史の人物に、他
の異なる外史の同一人物の情報をそのまま、相手に送り、能力とし
て加える事』だ。」

「えっと……それって、例えば……もし『天下無双と言われるほど
武芸に長けた私』が、他の外史で存在したら、ここにいる『私』に

その情報が送れて、その能力を加えることができる。……と、言うことですか？」

左慈さんの言葉から私は、自分なりの仮説を説いてみました。

「……さすがは天下の諸葛孔明ですね。左慈の話を少し聞いただけでそこまで理解をするとは……」

于吉さんは、感心したかのように私を賞賛してくれました。

「はわわ……それほどでもないです。」

私は思わず、照れてしまいました。

「ですが……さすがに、簡単な事ではありません。」

そう言つて于吉さんは真剣な顔つきになり、私に向かって話してきました。

「同調するには、ちょっとした条件があるんです。それは……『貴女と同じく、北郷一刀の事を憎んでおらず、武將たちへのみを憎んでいる貴女』でなければいけないのです。」

「えっ！？どうしてですか？」

さすがに意味が分からなかったので、聞いてみる。

「貴女と同じ意思でなければ、『貴女の意味』と『送られてきた貴女の意味』が互いに拒絶反応を起こして貴女の体に負担がかかり、最悪の場合には死に至る可能性があるんです。」

「そうなんですか……」

この言葉の意味は、『自分の思っているようにはなれないかもしれない。』と言う事でした。私が望んでいるような私が、今の私の意志と違っていれば『同調』することが出来ないのです。私はその事が分かると落胆してしまいました。

そんな中、于吉さんがいつてきました。

「ですが、心配には及びませんよ。我々が調べた結果、貴女と同じような意思をもっているのは確認をただけで、800億存在していますから。」

「は、800億!!!!??」

于吉さんが述べた数に私は驚きを隠せなかった。

すると、于吉さんは涼しい顔で……

「何を驚いているんですか、こんなのはまだ少ない方ですよ。」

……と言ってきた。

「それに、この方法であれば能力が付け足していけるのですから、その800億の貴女が基である貴女に『同調』すれば、軽く呂布を倒せるほどに強くなるでしょう。」

于吉さんの言葉を聞いて、私はその姿を想像してみました。

軍師であつた自分が天下無双と謳われる恋さん…いや、呂布を圧倒する……

「／／……えへへ」

思わずにやけてしまう私。

「…さて、長々と話してしまいましたが、本当に貴女は復讐をする気があるのでしょうか…貴女が私達の力を借りずにこのまま消えてしまつと言つ選択肢もあります。復讐をやりたくないのであれば、消えてしまつと言つ事もあります。」

「……いいえ、私はもう決めたんです。お願いします、私に力を与えてください。」

于吉さんはそう言ったが、私は決意を変えることはありませんでした。だって、一刀様は私一人だけの人だから……

「……分かりました。貴女の決意を確かに見せていただきました。…では左慈、準備をいたしましょうか。」

そう言つて于吉さんは、左慈さんの所に行きました。

（それからしばらくして）

「…では少しの間、目を閉じてください。頭痛がすると思いますから、頑張つて堪えて下さい。」

「……はい。」

いよいよ始まります。…まさか敵であつた人たちに、力を与えてもらうなんて思つてもいませんでした。

「いくぞ、于吉!!」

「ええ、……『同調』開始!!」

「……!??!!アアア!!…アアアアア!!!!」

左慈さんと、于吉さんの声が聞こえてから、しばらくして…私は、今まで感じたことのないような激しい頭痛に襲われました。

どのくらい痛いのかと言えば、今まで『痛い』と感じていたものが、蚊に刺されたような風を感じる程でした。

「ウウウ……アアアアアア!!!!」

そして、私は頭痛と共に、今まで体感した事の無かつた出来事が頭の中に流れて来ました。

私以外の女を選んで、一緒に光に吞まれて消えていく二人……

そして、その光景を恨むように見る私……

その女は度々違う女に変わって、その光景が繰り返された。

何回も……

何十回も……

何百回も……

何千回も……

何万回も……

繰り返した。

「アアアアア……！……どう……して……な……んで……
……え……ら……ん……で……く……れ……い……の……」
私の心には痛みと悲しみが、一気に、込み上げてきた。

……

「……ふう……『同調』終了しました。」

「……ハア……ハア……」

「大したものだな……800億の記憶と全て同調させるとはな……
どうだ、力を感じられるか？」

「……ハア……ハア……は、はい……物凄く……か、感じます……」

左慈さんに声を掛けられた私は、息を切らしながらもそう応えました。

実際、力を感じられるようになったのは事実である。今の私なら呂布はおるか、百万以上の軍隊を一人で相手にしても余裕で戦える自信がある。

「それでは、疲れているところを悪いですが……今度は貴女の姿と名前を変えましょう。」

于吉さんは、そういつて近付いて来ました。

「あ、あの…于吉さん…どうして姿と名前を変える必要があるんですか？」

私のその問いかけには、左慈さんが答えてくれました。

「これからお前が行く外史には、お前とは違う諸葛亮が存在している……同じ外史に二人も同じ人物がいては様々な悪影響を及ぼすからな。」

左慈さんの言う事がどうゆう事なのかは、私でも分かる。

確かに同じ世界に二人も同じ姿で同じ名前の人間が居たら、ややこしいし、気味が悪い。

「で、でも…一体どうすれば姿を変えられるんですか？」

私がそう言うと、于吉さんが袖口から一つの小さな瓶を取り出しました。

「この薬を、自分になりたい姿を想像して飲むと、その想像の人物像と全く同じになれるのです。」

……何だか何処かで聞いた事があるような気がしましたが、私はその瓶を受けとると、早速飲むことにしました。

「（やっぱり、背は高くしたいし……む、胸も大きい方がいいよね。そして他には……）」

そう考えながら、私は瓶の中の薬を飲みました。すると、私の身体が光り、身体に変化があらわれました。

まず、今まで背が低いほうだった左慈さんを見上げる形だった私は今では、左慈さんと同じくらいになった。

そして、胸には……今まで感じた事の無かったずっしりとした重量感をちゃんと感じられるようになり、触ってみると確かな柔らかさで触られた感触を感じられました。（涙）

そして髪の毛は、私のふくらはぎにまで伸びて、髪の色も金色から黒色へと徐々に変わっていきました。

「おやおや、随分と変わりましたね。」

于吉さんがそんな事を言っていると……

「次は名前の件だぞ。お前には、今の諸葛亮孔明の名前を捨ててもらうことになるがいいな。」

左慈さんは早く話を進めようとする。それより……

「…はい。それで、あの…真名の方も捨てなければいけないんじゃないでしょうか？」

真名の方はすてるべきかを聞く。すると左慈さんは……

「別に捨てたくなければ、捨てなくていい…捨てるか捨てないかはお前の自由だ。」

……そう言った。

私は、これから新たな人生を踏み出すだ。復讐のために……

「……分かりました…じゃあ、真名も捨てます。だって今の私はもう、『朱里』ではないから……」

復讐をするためには…全てを断ち切らないといけないから……

そう思っていると于吉さんが口を開きました。

「分かりました、では私が貴女に新たな名前をあたえます。

……性は司馬、名は懿、字は仲達、真名は……『零里』（れいり）と言っのはいかがでしょうか？」

于吉さんの提案してくれたとしてくれた『司馬懿』と言っ名前には何だか不思議な気持ちになりましたが、新たな真名の『零里』（れいり）と言っ名前は、今の私にはぴったりの感じがしました。

「……はい、いいと思います。今日から私は『零里』となります。」

私は新たな名前を受け入れると……

「では、いよいよ貴女には新たな外史に行ってきてもらいますよ。」

于吉さんは鏡を出しながら、そう言いました。

いよいよです……

いよいよ私の復讐が始まるのです。

「はい……あの、その前に一つお願いをしていいでしょうか？」

「構いませんよ。」

私が質問をしてもいいかを聞くと、于吉さんは快諾してくれた。

「あの……一刀様は必ず私の前に現れるようにしてください。絶対に他の武将達の前に現せないで下さい。」

一刀様は、私以外の女には誰一人として渡してはいけませんから……

「……分かりました。では、そちらはこちらに任せてください。」

于吉さんはまた、快諾してくれました。

「ありがとうございます。」

私は笑顔でお礼を言いました。

「では、この鏡に触れば、外史への転移が行われますから……鏡に触れてください。」

私はそう言われて、于吉さんの持っていた鏡に触れました。
すると鏡から光が出て、私の身体を包み込んできました。

第0・5話（後書き）

次回は出来たら、本編の前に零里（無印朱里）の設定でも書こうかと、考えています。

疲れました〜

零里の設定（前書き）

さあ、零里の簡単な設定が出来たので、投稿をします。

ちなみに、零里はテイルズの技を、自分の考えたオリジナルの技として使用することにします。（私の分かる範囲までの技を）

零里の設定

名前…

性…司馬

名…懿

字…仲達

真名…零里^{れいり}

特徴…

身長…左慈と同じ（恋姫では、星）くらい

胸の大きさ…翠以上、愛紗未満

髪の色…黒色

武器…不明（基本的にどのような武器でも、使用可能。）

強さ…（最高がSSS+、最低がCの設定）

統率…SSS

武力…… S S + (恋でSとすると)

知力…… S S S + (朱里でSとすると)

政治力…… S S S +

魅力…… S S S

(強くしすぎか?)

〈説明〉

無印版の『恋姫無双』の外史で一刀に選ばれず、他の恋姫達に復讐を誓った朱里が、于吉達の力を借りて変化した姿。

能力は、他の外史の朱里と同調して、付け加えられたため強くなっている。

一刀に対しての依存と恋姫に対する恨みは相当なもので、他の恋姫(特に無印版で出ていたキャラ)と一刀が話しているのを見ると「一刀に話かける資格はない。」と言うような雰囲気を出しながら一刀と恋姫を切り離すほど。

零里の設定（後書き）

さて、いよいよ本編……零里が新たな外史に降り立ちます。

そしてそこで待っていたものは……

では、また次回。

第1話（前書き）

さあ、いよいよ零里が外史に降り立ちます。

なお、く。く。SIDEくからくSIDE OUTくの中以外は、全
て零里の視点だと考えてください。

テイルズ技が出ています。

第1話

く????SIDEく

果てしない荒野の中を、三人組の頭巾をかぶった男達が歩いていた。

「おいチビ……なにかうまい話とかないのかよ。」

三人組のうちの一人の男が、チビと呼ばれた小さい男にはなしかけた。

「そんなのないっすよ……オイ、デクはどうなんだよ……何かいい話ないか？」

チビと言う男が、自分とは対照的な三人組の中で一番の大男……デクに話しかける。

「んつと……そうなんだな……この先にある街に、とっても美味しいって噂のラーメン屋があるんだな。」

「そうゆう事じゃねえ!!俺が言いたいのは、『何か金になりそうな話は無いのか』って言うことだよ!!」

デクの言葉を聞いて、三人組の最後の男がデクにツッコみを入れて殴りかかる。

「…アウウゝ、痛いんだなアニキ」

デクが頭を押さえつけてっていると……

「……そういえば、『噂』って言葉で思い出したんですけど……」

チビがそう呟いた。

「前に居た街で聞いた噂で、こんな噂があつたんです。……『流星と共に白い衣を纏う天の御遣いと、その御遣いを支えし神が乱世に降臨する。』つと……」

「はあゝ！？何だよその噂、そんな事起こる訳がねえだろうー！……それに何だよ『白い衣を纏う御遣いを支える神』って……どう考えても立場が逆だろうが！……そんな馬鹿げた話は忘れる。」

チビの噂の内容に、馬鹿馬鹿しく思えたアニキは噂を忘れると言いつ出す。

「でもアニキ……この噂は街の中どころか、大陸中でかなり有名で、今ではその噂を生きる希望にしている奴も居るくらいなんですよ。」

チビの噂の凄さを聞いて、アニキは少し顔をゾツとさせる。たかが噂にどれだけ真剣に喰いこんでるんだと思ったのだ。しかし、それと同時に閃きが走った。

「……よし、ならその御遣いと神が降りてきたら俺達でそいつ等を倒して、俺達が新しい御遣いと神になってやろうぜ。」

「「エエエエエエエエエ！！？？」」

アニキの突然の言葉にチビとデクが驚いた。

「ほ、本気なんすかアニキ！？御遣いだつたらまだ勝てるかもしれないっすけど、神なんか相手にしても勝てないっすよ！？」

「そ、そうなんだな……神様に逆らったら、死んじゃうんだな。」

チビとデクはアニキの無謀とも言える行動を何とかして諫めようとする。するとアニキは……

「うるせえ！！……そんなのは、奴らが勝手に話を大きくしただけにすぎねえんだよ！！……それに、そいつ等を倒したら、俺達は街の中どころか大陸中に俺達は御遣いや神よりも強い……『真の救世主』として、名が知られる。そうになったら……英雄扱いされて、街のモンはタダで食えるだろうし、大陸中のいい女を俺達の物に出来ると言っ……酒池肉林生活がおくれるんだぞ！！」

と自信満々に言った。チビとデクはその光景を想像し、思わず顔がにやけて……

「アニキ、俺も一緒に戦わせてください！！」「……オ、オレもなんだな！！」

あっさりと、御遣いと神と戦うことを決めた。するとその時……

「……アッ！！」

デクがいきなり大きな声を上げた。

「……ん？どうしたんだよ、デク。」

アニキがそうデクに聞くと、デクは空に指を向けながら……

「……りゅ、流星が落ちてきたんだな!!」

と言った。その言葉を聞いたアニキとチビは、「何イイイイ!!?」と声をあげながら空を見上げた。

するとそこには、昼間の時間帯だと言うのに流星が流れて地表に落ちたのだ。それも二つ……

「二つの流星だ!!きつと御遣いと神と一緒に降りてきたんすよ!!」

「よし、急いで落下地点に行くぞ!!……俺達の酒池肉林のために!!」

「「応ッ!!!!」」

そう言って三人は流星の落下地点へと向かった。

しかし、彼らはまだ気づかなかった……この行動がどれほど愚かで無謀な行動だったのかを……

〈SIDE OUT〉

「……着いたんでしょうか?」

于吉さんの鏡の光に飲み込まれてから意識を失って、その間に私は新たな外史に飛んだことを辺りの風景を確認して、理解できました。

「……それにしても一刀様はどこ………に………!!?」

私は第一の目的である一刀様を探していると、私のすぐ隣に一刀様が眠っていました。

ずつと私が会いたがっていた私の大好きな人、それが今………ううん、これからもずつと、私だけの一刀様になるのだ。でも、これで安心してはいけません。

「（この『私だけ』の一刀様を………他の女達から守っていかないと………）」

そうだ、この外史には私から一刀様を盗んだ女達もこの外史にいる。私は一刀様を奪っていった他の女達に復讐をして、一刀様を守っていかないと………

それが私………司馬懿仲達………『零里』の役目ですから………

それにしても………

「（可愛いらしい寝顔です）」

こんな事を思ったら怒られるかもしれませんが、こうして見てみると本当に可愛らしいです。こんな風に無防備な一刀様の寝顔を見るのは、すごい久しぶりに感じちゃいます。………無防備な一刀様………

「（い、今なら………／＼）」

私は顔を真っ赤にしながらも、自分の顔………もとい、口を一刀様の………く、く、口に近づけようとしたその時………

「よつしやあゝ！！酒池肉林までもうすぐだあゝ！！」

聞こえてきた声に反応して、口付けを断念しました。

……せつかくの機会だったのに、邪魔をするなんて許さないです。

……空気も読めない下衆ですね……そんな下衆は死に値します。

そんな事を考えていると、三人組の男達……もとい下衆達がやってきた。

「おうおう、なかなかの別嬪な姉ちゃんに、白い服を纏った男か……すると、この二人が噂の御遣いと神様ってやつか。」

髭顔の下衆が私と一刀様を見て、何やら呟きました。

「ねえ、アニキ……神様は殺さないで、御遣いだけを殺しちまう事にしましょうよ……ケケケ」

「そ、そうなんだな……そして俺達のお楽しみするんだな……グヘヘ」

背の低い下衆と背が大きいくせに太った下衆が、私に向かっていやらしい視線を送ってきました。と言うかこの小さい下衆……今、一刀様を『殺す』とか言っていましたよね……こいつは、ただ単に『殺す』だけでは済ましません。

「ヘヘ……そうだな、じゃあまず御遣いの服を剥ぎ取ってから御遣いを殺して、こっちの神様は俺達のお楽しみのお女神様になってもらおうか」

髭の下衆がそんな事を言い出しました。……一刀様を殺す事なんて私がさせません!!

「貴方達はこの人が御遣い様だと分かって、どうして殺そうとするんですか!？」

こんな下衆を相手に、こんな口調で話す私はまだ甘いのかもしれません。

すると髭の下衆が……

「そんなモン決まってるだろう!!俺達はその御遣いを殺して、俺達が新しい御遣いになり、酒池肉林な生活を送る為だよ!!」

……こいつは、自分の欲望の為に一刀様を殺して、自分が御遣いとして成り上がりとしていたのだ。

まさしく、この下衆のような者を……『人間のクズ』と言うんでしような。

もう私、我慢出来ません。……一刀様の事をここまで馬鹿にしたこのクズ達を、懲らしめないといけませんね。

「だが安心しな……俺達はある人には手は出さないから、その代わり俺達のお楽しみに……『幻竜拳!!』……なっ……ゲエツ!!」

私は髭のクズが言葉を言い終わる前に、大きく踏み込んで間合いを一気に詰めて、氣を込めた拳の一撃を相手に決める「幻竜拳」と言う独自の技を髭のクズのお腹に放ちました。

「……ゴフツ!?!……ゴフツ!?!」

髭のクズは胃の中の物を全て吐き出すだけでなく、血も混ぜて吐いている。気持ちが悪い物を吐くなんて、やっぱりクズですね。

ついでに……私はそのクズが腰に差していた剣を盗んで、髭のクズの首を落として始末をしました。……私の始めての『人殺し』でした。

「ア、アニキッ！！？？」

残りのクズ二人が、髭のクズの死体に近寄ります。……私はそのクズ二人組を異物を見るような目で……

「気持ちの悪い言葉や物を吐かないでください。……私はこの御遣い様に、全てを捧げると決めتانです……その御遣い様を『殺す』なんて言うあなた達のようなクズは、生きている意味すらありません。だから私が今ここで……殺します。」

……一刀様が眠っていて良かったです。こんな私の姿を見たら、私のことを嫌いになっちゃいそうです……でもこのクズ達は、私が大好きな一刀様のことを『殺す』なんて言いましたから、一刀様を守るためにはしかたないですね。

……それにこんな私でも、きっと一刀様なら愛してくれるって信じています。

「……よ、よくも……ア、ア、アニキを……ゆ、ゆゆゆ、許さないんだな……！」

……また空気が読めないクズが、私の時間を台無しにしました。

声の様子と剣を持っている手の震えからして、私のことが恐いみたいです。……恐いなら恐いで素直に逃げたら、クズとしては可愛げがあるのに……ま、どの道逃がしませんけどね。

「声が震えていますよ。そんなに私が恐いんですか？」

「ち、ちち違うんだな！！……ここ、恐くないんだな！！」

それを恐いと言うことが分からないとは、本当にクズなんですね。

……この太ったクズで少し、遊んであげましょう……

「……でも貴方は、一刀様のことを『殺す』とは言ってなかったの
で、今から言うことをやれば……特別に許してあげることも考えま
す。」

「「……エツ！？」「」

二人のクズは「本当に！？」と言う表情を浮かべました。……と言
うか小さいクズ、何で自分も助かるような顔をしてるんですか？貴
方はもう決まってるんですよ。……その事は置いて、私は手を
合わせてこう言いました。

「『どうかこのクズに……今一度、今一度……生きる機会をお与え
てください！！』……と言えば、考えてあげましょう。」

言うや否や……太ったクズは即座に持っていた剣を捨てて、土下座
まで行いました。……『土下座をしろ』なんて一言も言っていないの
に……このクズには男としての威厳は無いのでしょうか？……無い

んでしょうね、だってクズですから。

「ど、どうかこのクズに……今一度、今一度生きる機会を……」

私はそこまで言葉を聞くと、剣に自分の氣を溜めて土下座をしているクズに一気に近づき……

「襲爪雷斬!!」

土下座をしている太ったクズを瞬時に飛び上がるようにして切り上げ、私の氣によって発生した、落雷をお見舞いして、さらにクズの頭上から剣を振り下ろして切り捨てました。

太ったクズは断末魔をあげる間も無く、絶命をしました。

「な、なんで……」

残った小さいクズは、訳も分からないと言った表情で地面にへたりこんでいました。……ふと下半身を見ると、凄く濡れていました。

……もしかして、『おもらし』ですか？

この年にもなっても直らないなんて……もう『クズの中のクズ』ですな。

「さっき言ったじゃないですか。……『御遣い様を殺すなんて言っただ、あなた達のようなクズは生きる資格は無い。』と……」

私は冷ややかな目をしながらそう言った。

「だ、だけど、デクはそいつを『殺す』って言ってなかったから、助けるっていったじゃないか!？」

このクズは、ちゃんと私の話を聞いていなかったみたいですね……

「私は『許すことを考える』と言っただけで、『ちゃんと助ける』なんて一言も言っていないですよ。……それに、あなた達のようなクズと一緒に居たら、問答無用でクズの仲間なのです。」

私の話を聞いて、小さいクズの顔が一気に青ざめていくのが分かりました。

「それより、あなたはどうしようか?……始めに私に向かっていやらしい視線を送って、一番初めに御遣い様を『殺す』と言って、私の話を勝手に勘違いをした『馬鹿』なのに加えて、いい歳をして『おもらし』をした『クズの中のクズ』であるあなたは、さっきの二人のクズよりも痛く、懲らしめないといけませんね。」(ニコッ)

私がそう笑顔で言うと、小さいクズは……

「う、うわあああああ!!!!」

そう叫びながら、逃げていきました。

……ニガシマセンヨ……

私は自分の体内の氣を開放して、小さいクズを上回る速度で、追いかけてました。

「はああああああ!!!!」

私は小さいクズに追いつくと、剣で連続で切り裂いた。

『ギャアアアアア！………』

それだけで小さいクズは絶命をしましたが、そうなくても私は攻撃をやめるつもりはありませんでした。

クズが絶命をしたことを確認すると、私はクズから距離を取り、剣にまた氣を溜め込みその剣を大きく振り下ろしました。

「魔王獄炎波！！」

私がそう言つと、クズの地面の下から私の氣で作られた闇の炎が噴きあがつて、その炎がクズを覆い、そして全てを灰にしました。

「私の目の前で『一刀様を殺す』なんて言つたからですよ……」

私は、首を落とされた髭のクズと、落雷を受けて丸焦げになった太ったクズと、今はもう、影も形もない小さいクズに向かって言つた。

「さて、ここでじつとしても仕方がありませんね……」

そう呟くと私は、一刀様のところへと戻りました。一刀様はあんな事があつたのに、全然起きませんでした。……まあ、起きない方が良かったです。

「……仕方がありませんね、近くの街まで運びましょう。こんなところに居たら、またみつかるでしょうから……」

私はそう呟くと、一刀様を背中におんぶをしました。

「まさか、一刀様よりも凄く小さかった私が、一刀様をおんぶするなんて思いませんでした……／＼／」

……ちなみにおんぶをしている間、一刀様の掌を私の胸に当ててたのは言うまでもありません／＼

第1話（後書き）

「僕の朱里ちゃんのイメージを壊すな!!」

そう思った人本当にゴメンなさい……でも、この小説の朱里ちゃん
は『零里』と言う別の人になったので……そこらへんはあしから
ず。

さて、このあとのお話ですが……まだ思いついてないので、しばらく
更新は時間がかかるとおもいます。

そうなくても、待ってくれる人が居たら嬉しいです。

感想の方もまっています。

では、また次回

第2話（前書き）

今月最後の投稿が間に合いました！

結構文章を書くのも大変なのでこれから、（誠に勝手ながら）月に一度くらいの更新にしたいと思います。

さて今回は、いよいよ一刀が零里とご対面します。

第2話

私が一刀様をおんぶして、しばらく歩いていたら小さな街が見えてきました。……ちなみに、この街の人達に話を聞いたところ、ここは荊州の中にある街だと言うことが分かりました。私の出身も荊州なので懐かしいです。

私は、その街の宿屋で一刀様が起きるのを待つことにしました。

……えっ？お金ですか？お金なら、さっきのクズ達からもらいました♪

私は部屋まで一刀様を運んで、あることを考えていました。

「（……この一刀様は、きっと私の事は知らないんでしょうね……）」

そう……この一刀様は……『この外史に現れる一刀様』なんです。だからこの一刀様は、『朱里』だった頃の私の事は当然分からないでしょう……

そう思うと少し寂しい気もしますが、それも仕方が無いでしょう……だって今の私は『朱里』では無く『零里』ですから。それに、だからこそ……この一刀様を他の女達から守って『私だけの一刀様』しないといけません。

「（私が……必ず……守つ……てみ……せ……）」

私は突如、襲ってきた睡魔に耐え切れずに眠りについてしまいました

た……

「一刀SIDE」

「(……………んっ)」

……あれっ？どうゆう訳だか目の前が暗いぞ。……あ、そっか。辺りが暗いのは俺が目を閉じてるからなのか。……でも、なんで俺は目を閉じてるんだろっ？？

「(えつと確か……学園に行く途中で何かにぶつかって、それ以来の記憶が全く無いな………と言うことは俺はそのまま気絶して………！！！？?)」

そこまで考えた俺は、ある一つの結論に達する。

「ヤバッ！！遅刻……だ………って、アレ??」

勢い良く目を開いて起き上がった俺が目にしたのは……

「……………ZZZ……………ZZZ……………」

……自分の隣で寝ていた女の子だった。

「……………(えつと、誰だろ？この娘……………)」

黒色のロングヘアをした、見た目的には俺よりも少し上くらいの年齢の娘だろうか？……それでも、彼女の寝顔にはそれなりの幼さ

があるけど……って、む、胸がデカすぎるだろ！！この娘！？服からはもう、これでもかっ！！ってぐらいの谷間が見えてるし！？

俺はとっさに彼女の事が見れなくなり、目をそむける。すると……

「（……あれっ？この部屋の感じ……何だか日本って感じじゃないな……）」

そう、部屋の風景は一言で言えば、まるで中国風のような風景なのだ。それに寝ている娘の格好を見ても、とても現代の日本の女の子の格好では無かった。

そんな事を考えていると……

「……………んっ……………んんっ……………」

女の子が今にも起きそうである。

「（……もしかしてこの娘、ずっと俺のことを看病してくれたのか？……だったらこの娘にもちゃんとお礼も言いたいし、ここが何処なのかも聞きたいし……そろそろ起こそう。）……あの、起きてください。」

俺はそう言っただけで彼女の肩を揺らした。

（SIDE OUT）

「あの、起きてください。」

「…………んっ」

眠っている時に男の人の声がして、肩を揺すられる感じがしました。
……あれ？でもなんで私、眠っているんでしょうか？……えっと、
私は一刀様を宿屋まで運んで……そうです！その後急に眠たくな
って、そのまま眠ってしまったって……って、今の男の人の声っても
しかして……………！！？？か、一刀様！？

「ふええっ！！？？」

声の正体が一刀様と分かって、私はそんな変な声をあげて、起き上
がってしまいました。

「うおっ！？」

私の声を聞いた一刀様は、凄く驚かれてしまいました。……は、恥
ずかしいです／＼／

「わわわわわ……………／＼／」

私はまだ、一刀様に起こされた驚きで、どうしたら良いか分からず
に混乱していました。

すると一刀様が……

「あ、あのお…………大丈夫ですか？…………と、とりあえず深呼吸をして
落ち着いて。」

と、言うてくださいました。

「は、はひっ！……すーはーすーはーすーはーすーはー……」

「いやいやいや、それ深呼吸になってないから……」

「はひっ！！？」

一刀様の言葉を聞いた私は早速、深呼吸を始めましたが、一刀様から深呼吸になっていないと注意されて、私はまた変な声をあげてしまいました。

……何だか、一刀様と初めて会った時のようです。

「はい、ご一緒に……すー……はー……すー……はー……」

「すー……はー……すー……はー……」

一刀様の後に続いて、私はゆっくりと深呼吸をしました。……こうやって一刀様と深呼吸するのは、すごく久しぶりです。

「……落ち着きましたか？」

「は、はい。」

一刀様に聞かれて、私はすぐに答えました。……一刀様を前にして、取り乱してしまうなんて恥ずかしいです。もう私は『朱里』では無いのに……

「良かった……ところで、貴女は一体誰なんですか？……それにこっつて、一体何処なんですか？」

私が落ち着いた事を確認した一刀様が、私とこの場所について聞いてきました。

……私は今までと違う名前名乗る事に抵抗がありました。が、そうしないと色々と大変なことが起こるようなので、私はできるだけ冷静さを保って、名乗りだしました。

「えっと、私は……姓が司馬、名は懿、字は仲達です。」

「……………えっ？」

私がそう名乗ると、一刀様は呆氣に取られたような顔をされました。

「……………あ、あの……………どうかしましたか？」

私は一刀様が、どうして呆氣に取られた顔をするのかを聞いてみました。

「い、いや、ちょっと待って……………さっきの名前って本当なの？……………本当に君は『司馬仲達』って名前なの？」

……………もしかしたら一刀様は、天の世界での『司馬仲達』を思い出されて驚いているのかもしれない。

私はできる限り平常な感じで……………

「はい、私の名前は司馬懿仲達ですよ。」

と、言いました。すると一刀様は……………

「そ、そうなんですか……じゃあ、ここは何処なんですか？」

と、今度は場所の事を聞いてきました。

「ここは荊州の街の中にある宿屋の部屋の中です。」

私は、一刀様に場所の事を詳しく教えてあげました。

「へ、へえーそうですか……（司馬懿って、もつと北の地方の出身のはずなんだけど……もしかして俺の知っているのとは、違うのかな？ 女の子になってるし……）」

場所の事を教えると、一刀様が何かを考え始めました。やっぱり一刀様は今の私と、天の世界での『司馬仲達』の事を考えているみたいです。

そんな一刀様に私はある事を聞きだしました。

「あの、それで貴方は……」

もちろん私は一刀様の事を知っているのですけれど、いきなり名前を言ったら変に怪しまれてしまうので、一刀様に名前を聞き出しました。

「あ、ごめん。そう言えばまだ名乗ってなかったね……俺は北郷一刀って言っただ。……所でさ、俺は一体どうしてこの部屋で、寝てたの？」

一刀様は名乗った後、今度は自分がどうしてこの部屋で寝ていたの

かを聞いてきました。

「え、えっと……私が道を歩いていたら、自分の目の前が急に光り出して、光が消えたらあなたが倒れこんでいて……それで私がおぶってここまで運んだんです。」

私は一刀様に聞かれた時、一瞬どうしようかと思いましたが、とつさに私はそれらしい話を作りました。

「えっ、貴女がおぶって運んだんですか？」

話を聞いた一刀様はそう言ってきました。

「はい……あ、大丈夫ですよ。私こう見えても力はある方ですから。」

「い、いや……そうじゃなくて、あの……貴女が俺をおんぶをしたら、その……」

「……あっ」

私は一刀様の言葉に答えると、一刀様はだんだんと視線をずらしていつて、次第に私の胸に視線を送っているのに気が付きました。

「／／／……だ、ただ大丈夫ですよ。わ、私気にしてませんから／／／」

「い、いや、でも………」じめん／／／」

私がおぶった際に、一刀様の手が私の胸に当たってた事が一刀様に

知られて、私はとつさに、気にしてないと言いましたが、一刀様が謝ってきてしまいました。

……胸に当てていたのは、私の意志なのに／＼

しかし、この一刀様を『私一人だけの一刀様』するためには、この外史に存在する他の恋姫達を排除しなくちゃいけません。……それをやるためには、まず一刀様が『天の御遣い』として起っていただかないと……

その為には、それらしいお話を創っておきましょう……

「あの……お話がちよつと違つてしまいますけど、私が話してもいいでしょうか？」

私が一刀様にそう聞いたら……

「は、はい……どうぞ。」

一刀様は私が話すことを、承諾してくれました。

「ありがとうございます。では……もしかしたら貴方は、あの『占い』のお方では無いでしょうか？」

私はまず、こう一刀様に話しました。

「……えっ？あの、『占い』って一体なんですか？」

当然ながら一刀様は、私に質問をしてきました。

「……実は私、この前に街でこんな話を聞いたのです。『白く光輝き、陽光を跳ね返す着物を着た天の御遣いと、その御遣いを支える神が、その力を持って乱世を鎮める』……と」

占いの内容は、あの髭のクズの言っていた単語を、私自身で創作したものです。でも、本物の占いと内容は変わらないはずです。……多分。

「実際に貴方は、白く陽光を跳ね返す衣を着ていますし、貴方は自分自身が今まで居た場所から、どうして此処に居たのかのかも分かってなかったんです。……これは貴方が『天の御遣い』と言っても十分な理由かと……」

「ちょ、ちょっと待ってください!!」

私が話をしていると、一刀様が慌てた様子で話に割って入ってきました。

「貴女の言っている事は、俺にはまるで理解出来ませんよ!……貴女の言っているこの服は、俺が通っている学園の制服の事で、素材に『ポリエステル』使ってるから光を反射しているだけだし……そもそも俺は天の御使いとか言うような、大層な人間なんかじゃないんだ。……きっと人違いか何かだよ。」

一刀様は私が話をした、『天の御遣い』は自分自身ではないと言ってきました。……そんな事は絶対にありません。だって一刀様は間違いない私の『天の御遣い』であって、私の求めていた『ご主人様』なのですから。

「仮に貴方が『天の御遣い』で無かったとしても、私には夢がある

んです。その夢を実現させる為には、貴方に『天の御遣い』として貴方にはこの乱世で、立ち上がってほしいのです。」

「……夢？」

一刀様はどうやら私が話した夢の内容が気になるみたいです。……でも、『復讐のため』なんて言ったらきつと一刀様は私に力をお貸しになってくれないでしょうからまたお話を創ります。

「……私はこの乱世の中で色々な人達を見て来ました。……重い税収を取られて生活難になり、やがて死んでいく人達……何かをした訳でもないのに、賊徒達から問答無用で殺されていく民達……そんな事などお構い無しに宮中の人達はずっと遊びほうけてばかり……こんな状況がずっと続いていたら、国は民達からの信用を失って、やがては国そのものが滅びてしまいます……」

私はそこで言葉を区切ると、一度深呼吸をしてから……

「私はそうした出来事を回避して、自分自身で国を変えるために自分の能力を持つて世の中を変えたいと思っていました……しかし、私の能力を生かせそうな人物が見つからずに、そのままただ時間だけを無駄に過ごしていました。……そんな時に、あの占いの内容を聞けたのです。そしてその時私は、『やっとな私の能力を生かして、私の夢を叶えてくれる人が現れた。』と思いました。そして今日、私の前に貴方が突然現れました。だから……お願いです!!どうか私に力を貸してください!!」

「……………」

私がお願いをすると、一刀様は静かに黙って何かを考え始めました。

……実際に私にはさつき言ったような事は考えているつもりですよ。民の皆さんが悲しむ顔を見るのは、お優しい一刀様はもちろん、私だって嫌ですから。ですが私の第一の目的は、『一刀様を奪っていった女達への復讐』です。

そう考えていると一刀様が……

「……俺だって、もしかしたら司馬懿さんの考えているような『仕えるべき人物』じゃないかもしれないんだよ？」

と言ってきました。……一刀様が私の仕えるべき主君じゃないはずがありませんよ！！私が慕っているのは貴方だけなんですから。

「いいえ、きつと貴方が私の求めていた人物に間違いありません！！」

私はそう強く断言しました。……ちょっと恥ずかしいですけど／＼

「……分かりました、俺がどこまで貴女の期待に応えられるか分かりませんが……俺も司馬懿さんの夢に協力をさせてください。」

一刀様が、そう仰ってきました。

「ほ、本当ですか！？あ、ありがとうございます！！」

私はすごく喜びました。また一刀様の元に居られる……そう考えただけでもう天へと昇る気持ちになりました。

私は早速、『ある事』を一刀様に提案しました。

「それでは、貴方に私の『真名』を預けますね……」

「……えっ？『真名』？『真名』って何？」

私が『真名』を預けようとすると、一刀様が『真名』が何かを聞いてきました。そうでした……この外史の一刀様は『真名』の事は知らないんですね。

「『真名』と言うのは、字で書くと『真なる名』と書いて、その意味の通り『その人の本当の名前』を表します。この名前は自分が本当に信頼している人物が、家族以外例え知っていたとしても口に出してはいけないのです。」

「……ちなみに勝手に呼んじやったら？」

「首を刎ねられても文句は言えないほど、失礼な行為にあたります。」

「

私が一刀様に真名の説明をし終わると……

「……そんな大事な名前を俺なんかに教えてもいいんですか？」

と、聞いてきました。……寧ろ私は、貴方に真名を言われても許すつもりなのに。

「構いません。私は出会った頃から、ずっと貴方に仕えたくて、ずっと傍に居たいと思っていましたから。」

私がそう言って一刀様に真名で呼んでほしい事を伝えると……

「分かりました……と言つても俺には真名は無いから、代わりに何かありませんか？」

と言つてきました。……代わりにと言つたら、一つだけありました。

「あの……それじゃあ一つだけ……」

私はそう言い始めるとお願い事を言いました。

「……私に対して敬語を使わないでください。仕えてる家臣に対して主君が敬語を使うなんて、みつともないですから。」

「い、いや……俺は貴女の事をそんな風に考えて無くて、ただ単純に仲間だと思つて……」

私の述べた立場を一刀様は否定をして、私の事を仲間だと言つてくれました。……こんな私を仲間だと言つてくれる様な人の良さでは、一刀様に勝てる人間は居ないでしょう。

「それでもですよ。……それに貴方は『真名の代わりに』と言つたのですからお願いをしたんですよ。……それに敬語を使われると余所余所しいから嫌いなんです。」

私がそう言つと、一刀様は観念したかのように……

「……分かったよ。それじゃあ、さっきしたけどもう一度自己紹介をしようか。……姓が北郷、名が一刀、字と真名はないから好きに呼んでくれていいよ。」

そう言つて、自己紹介を再び行いました。……さて、今度は私の番

ですね。

「えっと……姓が司馬、名が懿、字が仲達、そして真名が零里です。……これからは私の事は零里って呼んでください、一刀様」

「ああ……これからよろしくな、零里。」

私が自己紹介をすると、一刀様は手を差し伸べて握手を求めてきました。私はすぐさま一刀様の手に、自分の手を合わせました。

……えへへ、すつごく嬉しいです。

「でもさ、零里……俺がその『天の御遣い』って名乗るとしたら、もう一つの『支える神』って言うのは、一体誰が名乗るんだ？」

喜びに浸っていると一刀様が、質問をしてきました。……そういえば、私の話の中には『神』も存在するんですでした。……本当はクズ達の会話の中から出した単語なんですけど。

「はい……私が見つけたのは、一刀様お一人だけで『神』らしき人物が見つかりませんでした。……だからこの際、私がその『支える神』を名乗ろうかと考えているんですけど。」

私は一刀様に『支える神』は、私自身が名乗るべきだと主張しました。……実際、一刀様を支えるのは私ですし、あのクズ達も私が神の方だと思っていましたから。

「えっ！？そんな事しても大丈夫なのか？」

一刀様は、私が『神』を名乗ることに驚いていらしゃいました。

「実際には、居なかったのですから仕方ありません。……それに、『支える神』も存在して無いと『天の御遣い』と言う存在までもが、嘘ではないかと思われてしまう事だってあります。……そして、一刀様自身は私の事を『仲間』だと言っていて、他の人達から見たら一刀様が主君で、私が家臣と言う立場なのです。……そうゆう意味でも私が『御遣いを支える神』にならないといけないんだと思うのです。」

私が自ら『神』を名乗らなければいけない理由を、一刀様に教える
と……

「……確かに、一つの事を欠いていたら他の事も嘘じゃないかとも
思えるけど……けど、零里はそれでいいのか？」

と、一刀様は本当に名乗る事をしていいのか心配をしてくれました。
……やっぱり一刀様は優しく、大好きです。

「構いません、私は貴方に仕えていくことを決めたんですから。……
それを、言ったら一刀様だって、この世界で『天』を名乗ると言うは、『私は帝と同じ立場なのだぞ』と言っている様なものですか。」

私は笑顔でそう言うと、一刀様は困ったような顔をされて……

「ハア……それもそうだよな。……それじゃあ、『神の役』お願いできるかな？」

と言ってきました。どうやら、勝ったみたいです。

「はい、謹んでお受けいたします。」

私はそう笑顔で言いました。

すると、その時ある事に気付きました……

「……あつ！もうこんな時間になっちゃいました。」

外を見てみると……辺りは暗くなって、建物の明かりと月明かりが暗い道を照らしていました。

「……今日は、もう遅いですから……明日から本格的に動きましよう。」

私がそう提案をすると一刀様は……

「そうだね、じゃあ……俺は一体、何処で寝ればいいかな？」

と、言ってきました。

「……はい？普通にこのお部屋で休めばいいのでは？」

私がそう言つと一刀様が……

「いや、それじゃあ零里が寝る所が無くなるだろう。……だから俺は別の部屋で眠らせてもらうから。」

と仰ってきました。

「あ、あのお……実は私が借りたのはこのお部屋だけなんです。」

「……………へっ？」

私の言葉を聞いた途端、一刀様が呆氣に取られた様な顔をされました。……そんな一刀様を横目に私は話を進めます。

「私がこの宿屋に来たのは、一刀様を見つける少し前の時間帯でした。……その時には商人の団体が来てしまつて、唯一残ったのがこの部屋だつたんです。」

……先と言っておきますけど、このお話は嘘です。実際には宿屋のお部屋は、三、四室埋まつているくらいで、取ろうと思えば一部屋くらいは、すぐに新しいお部屋を取ることが出来ます。……クズ達の持つていたお金もそれくらいはありましたし。

……でも私がそれを行わなかったのは、二つ理由がありました。

一つ目は……『決起のための資金を無駄にしないため』でした。決起の為にはそれなりに資金など必要になってきます。その為にも、お金を少しでも節約しないとイケませんでした。

そして、二つ目が……『一刀様と離れ離れになってしまうから』です！！せつかく一刀様とまた会えたのに、一秒でもまた離れてしまつたら……私、悲しくて死んじやいそうなんですもん！！

「そ、それなら俺は床や廊下で寝るから、零里は布団に……」

一刀様は、私と一緒に寝るのは不味いのではと考えているようで、何とか私から離れて寝ようとしています……そんな事は絶対にさせません！！

「そんなところで寝てしまったら、風邪をひいてしまいます!!もう、私と一緒に布団の中で眠るしかありません!!」

私は半ば興奮をしながら、言いました。……い、嫌らしい事が目的じゃ無いですよ!?!ただ、こうしないと一刀様が風邪をひいてしまいますから……ほ、ほんとですよ!!?

「そ、そんなに興奮しなくても……」

「はわっ!!?!」

一刀様の注意に思わず、朱里だった頃の口癖である「はわっ!!?!」を言ってしまった。

「そ、それじゃあ……甘えさせていただいちゃおうかな?」

一刀様は仰向けになって、そう仰ってきました。

「ど、ど、どうぞ!どうぞ!どうぞ!」

私はそう言って一刀様に掛け布団を掛けました。そして……

「あの、それじゃあ失礼します……」

「あ、ああ……」

私は一刀様の返事を聞くとゆっくりと布団の中へと入りました。

……

.....

.....

..... えっ？その後は、どうなったかですか？..... は、恥ずかしくて
とても言えません！！！！／／／

第2話（後書き）

いかがだったでしょうか？

今後もう少しずつですが、完結まで地道にやっつけていこうとおもいます。

ご感想もお待ちしていますので。

それでは、また。

第3話

「…………んっ…………んっ…………」

窓から差し込んで来たお日様の光が顔に当たって、私は目を覚ましました。

そ、そういえば昨日は一刀様と一緒に眠っちゃったんでした／＼
…緊張の為に、あんまりよく眠れませんでした……

私は横に眠っているはずの一刀様を起こそうとていたら……

「あっ…おはよう、零里……」

一刀様は先に起きていました。…………それも目の下にクマを作って……
…って!?

「ど、どどどどうしたんですか、一刀様!?!め、目の下に、く、くくクマが出来てますよ!?!?」

私は慌てた様子で一刀様がどうしたのかを聞きました。…………だって、一刀様に何かあったら私……もう生きていく事が出来ませんもん!!

「お、落ち着いてよ、零里。…………俺、ただ昨日は眠れなかっただけ
なんだから……」

「…………えっ?どうして眠れなかったんですか?」

どうやら一刀様は、昨日眠れなかったみたいなので、私はその理由

を聞き出しました。

「いや、俺……女の子と同じ布団で寝ることなんて、今まで経験したことが無かったから……緊張しちゃってさ……」

この一刀様は、女の人と交流は全く無かったんですね……天の国では、男女に対する差別などがあるのでしょいか？

「一刀様は、今まで女の人と付き合ったことが全く無いのですか？」

私がそう聞いたら一刀様は……

「別にそこまでじゃないよ。……ただ『女の子とこうして同じ布団に入るのが初めてだった』ってただだよ……」

と、そう仰ってきました。……私はさらに、質問をしてみます。

「じゃあ、一刀様の世界では……男女の間で差別が起こっているんですか？好きな人同士と一緒に居られなかったんですか！？」

「へっ！？す、好きな人って……！？」

「……あっ／＼／」

私は勢いの余りに漏らした言葉を、一刀様に聞かれてしまって私は思わず顔を真っ赤にしました。

「／＼／う、ううううううめんなさい……！いいいい今は……そ、その……」

私が慌てふためくと一刀様は……

「い、いや／＼その、あの……あっ！？む、昔は確かに差別はあったみたいだけど、俺の世代ではそう言うのは無くなったよ。」

と、慌てながらも天の国には、差別が無い事を教えていただきました。

「そ、そうなんですか／＼」

「…うん、そう／＼」

「……………／＼」

「……………／＼」

……それからしばらくの間は、私と一刀様はお互いに背を向き合わせて、一言も会話をしないまましばらく経っちゃいました。うう、もしかしたら嫌われちゃったんでしょうか…私……

そんな事を考えていると、一刀様が話しかけてきました……

「…えつとさ……お、俺もその……零里のことが好きだよ／＼」

「ふへっ！？／＼」

一刀様の言葉を聞いて、私はまた変な声をあげちゃいました。…ああ、何だか頭がクラクラしますう／＼／

『一刀様が私の事が好き』って／＼こ、こんな事を…い、いきな

り言われて、どどどどうしよう／／

「……はわわわわ／／じゃああの、く、口付けなどは……」

……って、い、いきなり何を言っているんですか、私は！？／／……
……こ、こんな事言ったら、一刀様に迷惑が掛かっちゃいますよ／／

「え、えつと／／……そ、それは流石に／／」

当然の事ながら、一刀様は慌てていらっしやいました。……はうゝ
何でこんな事を言っちゃうんでしょう／／……私は大馬鹿ですう

……

「そ、それよりも下に行つてご飯食べよっか？」

「……は、はい。そうですね。」

一刀様は話題を変えようとして、私をお食事に誘っていただきました。
た。……でも『キス』……したかったです／／

……

「それで、今日は一体どうするんだ？零里。」

私達はお部屋から出てきて、下の階でお食事を済ませた後、一刀様
がこう聞いてきました。

「そうですね……街の人達に『天の御遣いと神が現れました。』と、

大々的に発表をするのが一番なのですが……それには、ある状況の中の方が一番効率的なのです。」

「???『ある状況』って何なのさ?」

一刀様は私に、どの状況が効率的なのかを聞いてきました。

「その状況とは……『一度街の人達が、絶望感を感じた瞬間』です。」

「……えっ?それってどう言う事なの?」

一刀様は、まだ分からないみたいです。……もう少し詳しく話す事にしましょう。

「要するに……私の聞いた占いは、例え国中で有名になっていると言っても、あくまで噂の範囲内なので、住民の皆さんが危機感を持つていない時に、『天の御遣いと神が現れた』と言ったとしても皆さんは、半信半疑の気持ちで一刀様の事をみるでしょう。……そんな風に考えている人達は、一刀様の為に尽力を尽くそうとは思いませんでしょう……」

だから、一度死の瀬戸際に立たされたような状況の中で、『天の御遣いと神が現れた』と言えば皆さんは、『ああ、この街を守る為に御遣いと神様が現れてくれた。』と、思います。そうすれば御遣いと神の魅力に惹かれていく人達も現れるようになり、他の国からも助けを求めてやってくる人が増えていきます。

そうした人達と共に、力を付けていくことが世を混迷から救う手立てだと、私は思っています。

……あ、あの、お分かりいただけましたか?一刀様。」

私の長くなってしまった説明を、ちゃんと一刀様に理解をして頂けたか心配になった私は、一刀様に聞いてみました。

すると一刀様は……

「……えっ！？う、うん。分かったよ……ハ、ハハハ……」

と答えました。……このお顔は絶対に分かってはいらっしゃいませんね。……でも、それでも私は怒ったりはしません。……むしろ、嬉しいです。一刀様は何も出来ないほうが、それだけ私に相談をする事があると言うことです。……ああ、私は本当に幸せ物です」

「えっと……つまり私達が動き出す為には、まずは事件が起こらないといけないのです。……例えば、『この街に賊が襲い掛かって来る。』と言う事ですかね。」

私は要点だけを一刀様に詳しく教えました。……すると一刀様は、ようやく理解が出来たようなお顔をされました。

「……でもさ、いくらなんでもそんな都合良く襲い掛かってくるのかな？」

一刀様がそう私に質問をしてきた、その時……

「た、大変だ！……賊徒の大軍が、この街を襲いに来るぞ……！」

と、男の人が宿屋に入って叫んできました。

この知らせを聞いた宿屋の中のお客さん達は大混乱を起こし、どうしていいか分からずに、右往左往し始めました。

「れ、零里……どうしよう？本当に賊が襲ってきたぞ！？」

一刀様も賊の突然の襲来に、落ち着けない様子でした。……それはそうでしょうね。この一刀様は、こんな経験は初めてでしょうから。

私はそんな一刀様に微笑んで……

「大丈夫です。一刀様は何が何でも私が守ってみせますから」

と言うと、私は宿屋に叫んで来た人の所に向かいました。

「すみません。」

私は叫んだ男の人に声を掛けました。

「な、なんだよ……おれは今、忙しいんだよ。用ならほかに……」

男の人は喋っていました。私は遮る形で……

「貴方は、その賊を確かに見たんですか？」

と、話しました。

「当たり前だろ……！そうじゃなかったら、こんな風に慌ててる訳ないだろ……！」

男の人は、半ば苛立ち気味で言葉を返しました。

「そうですか……じゃあ、その賊の数はおよそどれくらいだったん

ですか？」

私は賊の数を聞きだしました。

「は？……えつと、1000人ぐらいだったぞ。」

男の人は賊の数を言い出しました。そして私は、立て続けに……

「それじゃあ、この街での女子供を除いての人口はどれくらいになりますか？」

と質問しました。すると、男の人は……

「えつと……600人ほどだと思うぞ。」

と、答えてくれました。

「分かりました。……あのそれと、出来るだけ多くの人達をこの宿屋の前に集めてくれませんか？」

私は宿屋の前に、人を出来る限り集めるように男の人に依頼しました。

「はあ？……まあ、そんな事ならやつてもいいけど、そんな事やつてもあんまり集まらないかもしれないぜ？」

男の人はきつと、あまり集まっては来ないだろうと私に警告をしました。

「構いません……集まるだけでいいんです。」

私はそれだけを言いました。

「分かった……じゃあ、伝えにいつてくるぞ。」

男の人はそう言って、宿屋を飛び出しました。

「お、おい零里……一体、どうするつもりなんだ？」

一刀様が、状況を確認をしにやって来ました。

「……それは後でお話をします。……今は宿屋に居る人達を落ち着かせましょう。」

私はそう一刀様に進言しました。

「えっ？あつ、うん……そうだね。」

一刀様の了解もあつて、私達は宿屋の中に居るお客さん達を落ち着かせに向かいました。

第4話（前書き）

さて、何だか最近気まぐれ更新気味のこの小説ですが、これからも何とか完結を目指して頑張っていきたいと思えますよ。

では、第4話をどうぞご覧ください。

第4話

私と一刀様は宿屋で混乱していた人達を落ち着かせていきました。最初のうちは皆さん、どうしたらいいのかが分からずに、慌てていました。が今では何とか落ち着きを取り戻して静かになりました。

……あと、一刀様が鎮静をしていた女は皆、顔を赤らめていました。……物凄く不快な気分でした。……女は全員、賊に殺されればいいのに……

そんな事を考えていたら、外のほうがだんだんと騒がしくなってきました。……どうやらあの男の人が人集めを終えてきたみたいですね。

「……人が外に集まってきましたね。……一刀様、外の様子を見に行きましょう。」

「……あ、ああ。」

私は一刀様と一緒に宿屋の外に出ました。

~~~~~

「……これは、凄い数だなあ」

一刀様が宿屋の外の人ばかりを見て、そう呟いていらっやいました。

私達の目の前には、ガヤガヤと騒いでいる100人ほどの民衆が集っていました。

一刀様はこんなに多くの民衆を見たのは初めてなのでしょうから、驚いていらつしやる気持ちも分かります。……でも、貴方はこれから、これよりもずくずくっと多くの人達を治めて行くんですから。

「……おい、一体これから何が始まるんだ？」

「そんなの知るかよ、俺はすぐにこの場所に来るように言われて来ただけだからな。」

「早くしないと賊が街に侵入してきちゃうのに……」

ざわざわ……ざわざわ……

街の人達は、これから何が行われるのか分からないまま、ただひたすらにざわめいていました。

「それで、零里……この後は一体どうするんだ？」

一刀様が私に次にどうしたらいいのかを聞いてきました。私はそんな一刀様にこう言いました。

「これからこの人達に、一刀様が『天の御遣い』である事を伝えた後にこの人達を戦わせるように発奮させます。……私が先に一刀様の事を紹介しますから、一刀様は私が来るように合図をしたら来てください。」

「ああ、分かったよ……けど俺、こんな大勢の前で話をした事がないから緊張するな……」

一刀様は、大勢の中で話した事はないから緊張していらっしゃるようです。何だか朱里だった頃の私を見ているようでした。私は一刀様を元氣付ける事にしました。

「大丈夫ですよ、一刀様。私も結構緊張しているんですから……それにこれから国の為に動くとなればこれ以上の人の命を預かる事になるんですよ。」

「……そうだよな、ありがとう零里……元氣付けてくれて。」（ニコッ）

一刀様は私に笑顔を向けてくれました。……う、嬉しいです／＼／

「／＼／……そ、それほどでもないです。そ、それじゃあ私が先にお話しますね／＼／」

そう言つて民衆の方へ向き直りました。……まだ顔が熱いです。

「皆さん聞いてください！！」

私がそう叫ぶと民衆の皆さんが私に注目をしました。

「皆さんも知っているように、今この街には賊が攻め寄せてこようとしています！！……それなのに今、皆さんは自分の身の安全の為に、長い間住んでいたこの街を見捨てて逃げようとしています。どうして貴方達は街を守る為に、立ち向かおうとしないのですか？」

……傍からみれば『何言ってるんだ』って思われる事を私は言つて

いる事でしょう。当然、そんな私に対する皆さんの反応は……

「何言つてやがるんだ、そんな事当たり前だろう!!」

「自分の命の方が大事だと思って何が悪いんだ!!」

と、言ったものでした。……ここでそろそろ、一刀様の出番としましょう。

「しかし、安心をしてください。……今この街には『天の御遣い』が降臨なされたのです。」

私はそう言つと、一刀様の方向を見て手招きをして一刀様を誘い出しました。

＼一刀SIDE＼

俺は零里に手招きをされて、零里の隣に立つ。すると、零里はまた話し始める。

「この御方こそ、この世界に現れた『天の御遣い』北郷一刀様なのです!!」

零里は高らかに宣言をした。

そんな零里の言葉に民衆は……

「その男が『天の御遣い』だと!?!」

「何だか弱そうだな……」

「だが、あの服……あんなに光を反射する服は見た事が無いぞ。」

そんな風に未だ信じられないと言う感じで俺の事を見ていた。そんな中、一人の男がこう言った。

「それじゃあ、『御遣いを支える神』は何処にいるんだ？」

そう……御遣いが居るのであれば、当然それを支える神も一緒に居る筈だ。その答えに零里は自分の胸に手を当てて……

「それはこの私、御遣い様に仕える事を決め……一刀様の為に全てを捧げる事を決めた……司馬懿仲達です……」

そう言っただけを宣言をした。

〈SIDE OUT〉

「一刀様の為に全てを捧げる事を決めた……司馬懿仲達です……」

私は『御遣いを支える神』が何処に居るかを聞いた男の人に対してそう告白しました。……ううゝ恥ずかしいです／＼……すると、また別の男の人が声を上げました。

「はあっ！？アンタみたいな姉ちゃんが神様だと？冗談を言うのもほどほどにしてくれ……」

……見てみるとその男の人は、街の人を呼びに行った人でした。男の人はそう言つて、告白をした私の話をまだ信じられないようです。……少し力を見せ付ける必要がありますね。

「……分かりました。では、貴方が私と戦つてくれますか？それでもし、貴方が私に勝つたら私の事を貴方の好きなようにしてくれて構いません。貴方が望むのであれば、この私の体も好きにして貰つてかまいません。」

そう言つと他の皆さんは「へっ!？」と驚かれました。それもそうです……女の子に勝負を申し込まれて、勝てたら体も含めて好きにして良いと言つのですから。この言葉を聞いた男の人は……

「……本当だな、その言葉に嘘は無いんだな姉ちゃん、グへへ……」  
そう言つて笑いながら私に真偽を確かめてきました。

……正直、気持ち悪いです。

「……はい。私は嘘は言いません。」

私はその男の人に少々怯えながらも、言葉が確かだと言つ事を伝えます。その言葉を聞いた男の人は……

「……よし、だったら俺があんたの力をみてやるよ。後で無かつた事にしろなんて聞かねえからな……ゲへへ、でもその前に……」

そう言つて男の人は、懐から短剣を取り出すと一気に走り出しました。……まさか!？

「あんたの力を出し切らせる為に、まずはその天の御遣いとか名乗る兄ちゃんを殺してからだ!!」

そう言つて男は真つ直ぐに、一刀様の所へと向かつていきました。

「くっ!させません!!」

私もとつさに一刀様に向かう男に向かつて走り出します。……そして

…グサツ

……そんな擬音が聞こえたように感じ、その直後に私の左の掌に痛みが走りました。

……私の左掌に短剣が刺さったのです。

「れ、零里!!」

一刀様は驚いて私に向かって叫んでいました。…そんな中、男がこう言ってきました。

「おいおい、先にくたばるんじゃないよ。あんたが先に死んじまつたら、この俺の楽しみが無くなるんだしよぉ……それにどの道俺のモノになるんだつたら、こんな兄ちゃんは要らねえだろ。」

……こいつはどうやら一刀様の事は初めから認めてないで、ただ単に私が欲しかっただけだったようです。……言うなればこいつも、この前会ったクズと同じだったんですね。……このクズにも『お仕置き』をしないといけませんよね。

「だからあんたは、素直にこの俺のモノになればいいんだ…」「言い残す事はそれだけですか?」「…ハアツ?」

クズが話している所を私が質問をして、クズが顔を歪めました。

「…言い残す事はそれだけですか?」って言ったんですよ。」

そう言つて私は短剣を刺された左の掌で、短剣ごとクズの右手を掴みました。

「!?!い、いてててて…!!は、離せ!!!」

急に手を掴まれたクズは痛がりました。…大して力も入れてないのに痛がるなんて、思った通りのクズですね。

「どうしたんですか?…私はまだ力を殆ど出していませんよ?…それにそんなに痛がるなんてそれでも男ですか?…違いますよね、貴方はただの『クズ』だからこんな事で痛がるんですよ。…だからそんな情けないクズは、私の力を証明する為の『生贄』になつてもらいましょう。」(ニコツ)

私はそう笑顔で言つと、掴まれたクズを含めて他の民衆も顔を青ざめていく事が分かりました。

「ヒッ!?!…あ、あの、俺を一体どうするんでしょう?」

クズが怯えながらそう言つと、私は少しでも恐怖感を与えないように笑顔で言いました。

「（ニコッ）こうするんです……獅子戦吼！！」

私はあらかじめ自分の右手に溜めていた氣を、クズの身体に獅子の形状にしてぶつけました。

「！！？グヘッ！？」

クズは私の技を受けて、勢いよく吹き飛んで民家の壁に当たって跳ね返りました。

「……ゴホッ！！……ゴホッ！！」

クズはむせ返りながらも、起き上がろうとはしませんでした。本当ならこのまま止めを刺したかったのですが、そうすると民衆の皆さんが私を恐れすぎて力を貸してくれなくなる恐れがあるのでやめておきました。……命があるだけでもありがたいと思って欲しいですね。

私は青い顔をしていた民衆の皆さんの方を向いてこう言いました。

「私の目の前で、この一刀様を『殺す』などと言わないでください。今回は、皆さんが私達の力になる事を前提として特別に生かしてあげましたけど、今後一刀様の事を狙ったり、一刀様の事を馬鹿にしていたら……どうなるかはわかりますよね……それじゃあ、この中で聞いていなかった残りの街の人にも私達に従うように言うてきてください」（ニコッ）

私が笑顔で言うと、民衆の皆さんは何故か震えながら一斉に頷き、離れて行きました。……？？皆さんはどうして震えていたんでしょう？……私は笑顔で言っていたのに。

「……零里。」

あ、一刀様が私に声をお掛けになりました。私は傷の事を心配されないように左の手に、自分の氣を溜めて傷の部分の再生速度を速めて自己治療をする『集気法』を行って傷を治しました。

「あ！一刀様……さっきの傷の事でしたら私は全然、大じょ」（パシッ！）」「ヒヤッ！！」

一刀様が傷の事を心配をしていたと思っていた私は、心配ない事を一刀様に伝えようとしたらいきなり一刀様に頬を叩かれました。

「か、一刀様……一体何を……」

私はどうして自分が叩かれた分からず、ただ呆然と一刀様の事を見ていました。……そして、私は気づきました。

……一刀様が、泣いていました。

「一刀様……」

私が声をあげると、一刀様が喋りだしました。

「……零里は、俺の事が好きなのか？」

「……えっ？」

一刀様が聞いてきた言葉はそんな当たり前の事でした。

「も、もちろんです！私是一刀様の事が大好きです。主としても男の人としても……「だったら！！」……は、はい！？」

私が話している途中で一刀様が、いきなり割って入ってきて私は驚きました。

「だったら、零里は俺の事を懸命に愛してくれよ！！例えどんな事があつたとしても俺の前から離れないでくれよ！！……間違つても俺の目の前で他の男に、『自分の体売る』ような事はしないでくれよ！！」

「あつ……」

そこまで言われて私はようやく一刀様が泣いていた理由がはっきり分かりました。……一刀様のことを認めてもらえるように私は確かにクズに、自分の体売るような事をしてしまいました。その結果一刀様は、私が真剣に一刀様の事を愛していないのではと言う気持ちを、一刀様に与えてしまいました。……そこまで一刀様は私の事を大切に思ってくださっていたのに、私は……私は……

気付けば私は涙を流していました。そんな私に一刀様は抱きついて来ました。

「改めて聞くよ。……俺の事を愛してくれるか……零里？」

一刀様が言うと私は、もう我慢せずに思いつき泣く事にしました。

「ヒッグ……はい、……ごめ……ヒッグ……ごめんな、さい……」

それからしばらくの間は私は一刀様の胸の中で泣きました。

## 第4話（後書き）

（後書きコーナー）

どうも、作者のマットです。さて、どうだったでしょうか？第4話……さて、私の気まぐれで始めることにしてみました。アシスタントはこの小説のヒロインである。『無印恋姫』の朱里改め、司馬仲達こと零里さんです。

零里「……どうも初めまして。……でも、どうしてこんな思い付きの企画に私が出る事になったんでしょう……」

はい、実は他の人の小説を見ていたら、後書きに原作キャラと作者の小話があったので自分もやってみようかなと考えました。

零里「それで選ばれたのが私ですか？……」

はい。

零里「……『お仕置き』が必要でしょうか？」

……えっ！？ちよっ！？まままま、待つて下さい！！どうして私が『お仕置き』を受けないといけないのですか！？

零里「……理由は二つです。

一つ、本編を書かずにこんな事を考えた駄目なマットさんの正念を叩き直すため。

二つ、この場には一刀様が居ない事です。」

か、一刀を呼ばなかっただけで私、『お仕置き』されるのですか!?

零里「一刀様です!!……どうやらその様子では一刀様に対する愛が足りないようですね……」

わ、私は男ですよ!!?

零里「男だからこそ、一刀様に対する愛が必要なんですよ。」

や、やめてください、零里さん……

零里「問答無用です」(ニコッ)

ヒイツ!?!……で、でも私が『お仕置き』をされたらこの小説が書けなくなりますよ!!

零里「うつ!?!……」

そうなったら、貴女と一刀のイチヤイチャが書かれる事なく終わってしまいますよ。

零里「そ、それは駄目です!!一刀様との愛がこの小説から無くなったら……私……私……」

……一応、言っておきますけど、この小説は貴女の恋姫達に対する復讐をメインにするつもりですからね。

零里「わ、分かっていますよ。でも、原作みたいに拠点も書いてくれるんですよね?」

えっ？……い、いやそれは……

零里「書いてくれますよね……」

いや、だから……

零里「カ・イ・テ・ク・レ・マ・ス・ヨ・ネ……」

それだと、本編が……

零里「……カケ」

……おくれるので……

零里「魔王獄炎h」

わあああああ！！！！書きます！！頑張って書きますから、だからそれはやめてください！！

零里「はい♪よろしくお願いしますね。マツトさん」

（はぁ～助かった）……さ、さて、今回は最後の部分は頑張ってシリアス風にしてみました。

零里「……アレでシリアスですか？」

うつ！？……確かに私はシリアスな話を作るのは苦手ですよ。でも、自分なりに頑張りましたからね。……それに評価するのは、読んでくださった人達ですから。

零里「まあ、いいでしょう。それに、この様子だと一刀様はもう私しか女として見ない事でしょうね。」

あつ、そうなるかはまだ分かりませんよ。

零里「……………」。

れ、零里さん…………どうして急に黙ってるんですか？

零里「いえ、やっぱりマツトさんには『お仕置き』が必要だと思いまして…………」

えっ！？ど、どうしてですか？

零里「決まってるじゃないですか。私にしか興味を持たない一刀様を書かない貴方の正念を叩き直します。」

で、でも零里さん。さっきも言ったとおり、私を『お仕置き』すると小説が…………

零里「それなら大丈夫です。更新に支障が出ないように手加減しますから。」

ヒイツ！？…………あつ！？あんな所に一刀が！？

零里「えっ！？どこですか！？」

よし、今だー！…………あ、それと感想を楽しみにしているんで、どうぞよろしく願いますねー！…………それじゃー！！

零里「あっ！？マシヤん……」ガシマセンヨ……」

## 第5話（前書き）

書き終えました。

改めて思つと自分ってホント文才が無いなと実感しました。

では、どうぞ。

## 第5話

一刀様の胸の中でしばらく泣いた後、私は氣を取り直して一刀様と向き合いました。

「……もういいのか、零里？」

「はい。もう気持ちもすっきりしました……ありがとうございます、一刀様。」

一刀様が私に大丈夫かどうかを聞かれて、私は落ち着きを取り戻した事を一刀様に伝えました。

……本当ならもっと一刀様とくつついていたかったのですが、今の状況を考えてやめておきました。また改めてお願いしたいです。

「……それにしても、零里ってあんなに強かったんだな。……正直驚いたよ。」

一刀様は私の強さを絶賛して、そして驚かれました。……まあ私が強いのは当たり前ですけどね。私は800億の外史の朱里と『同調』して強さが加算されているのですから、おそらくこの外史内では誰も私には勝てないでしょう。

「……ありがとうございます。だって私は御遣いである貴方に仕えて、貴方を守っていくために強くなりましたから。」

私は誇らしげな感じで一刀様に言いました。すると一刀様が……

「ん？……何だか零里、俺が御遣いとして始めから来ることが分かっていたみたいな言い方だな。」

と、聞いてきた時にはびっくりしてしまいました。まさか私が別の世界で一度、一刀様に会っていて一刀様に仕えて、一刀様と共に過ごしてまた一刀様と共に過ごす為に強くなつて別の世界である此処にやって来たとは絶対に言えません。

「あ、あの……それは……そう！！ゆ、夢で見たんです！！」

「ゆ、夢？」

私が考えた末に出した言い訳に、一刀様は首を傾げました。

「えつと……私が占いを聞いた日に、男の人と一緒に居る夢を見ました。……その夢の中では私を含めて、民の皆さんも絶え間ない笑顔をされていて、私の隣にいた男の人は、一刀様と全く同じような服を着ていて皆さんの笑顔の源のような感じがして、傍に居る私は『この人の傍に居たらきつと幸せになる』事を考えられるようになって、私も『この人に一生を捧捧げたい』っておもったんです。……だから私は一刀様の出現を何となく感じていたんです。」

「そうなのか。……でも、もしかしたらその男が俺であるとは限らないけど……」

自分の思いつきで言った言い訳に一刀様は納得をして、自分が夢の中の男の人である可能性があるかと仰いました。

「そんな事はありませんよ。……だって一刀様の笑顔を見たらドキツとするんですから／＼／（小声）」

私は出来る限り小さい声で言う……

「ん？……何か言ったか零里。」

一刀様に聞こえていたようで、一刀様が聞き出してきました。

「いえいえいえいえ！！？なんでもないですよ！！？」

私はとつさに誤魔化しました。うう……恥ずかしいです。

その後しばらくすると、民衆の皆さんが先程よりも多くの人を連れて集まって来ました。

……

集まって来た民衆の皆さんは、何とか立ち上がる様子を見せていますが、その心の中にはまだ賊と戦う事を戸惑っていらつしやるようです。……これはいけません。こうした僅かな迷いが戦場に出るとその隙にやられてしまうのですから。……ここはやっぱり一刀様の激励で奮起させないと……

「一刀様、民衆の皆さんに一言お願いします。」

私が一刀様に一言をお願いすると……

「えっ、俺が！？い、いやでも俺、こんな大勢の前で話した事なんて無いし……」

と、自分には未経験なので無理と仰いました。……そんな一刀様に私は笑顔で言いました。

「安心してください、ただ一刀様がお考えになっている事を皆さんに伝えればいいんですから。一刀様のその言葉に皆さんも、そして私も付いて行きますから。」

「……ああ。ありがとう、零里。おかげで少し落ち着きがとれたよ。」

どうやら一刀様の緊張感をほぐす事に成功したようです。……そして一刀様は私の隣に立って皆さんの方を向き直りました。

「一刀SIDE」

零里に励まされた俺は今、集まった民衆の前に立っている。

改めて見るとすごい数の人だ……右を見ても、左を見ても自分の視界に必ずと言っていい程の人の姿が入るのだ。……それだけこの世界の人達は恐怖に怯えて生活を送っているという事だろう。

……正直に言ってこんな人達になんて言えいいのか分からない。

俺は元々、こんな恐怖感とは全く縁の無い人生を送るだろうと思っていたんだ。それがどう言う訳か、俺はタイムスリップしてしまい、現れた所が場所が三国志の舞台である中国の三国時代の世界に現れたのだ。

……まあ、おそらくこの世界は俺の知っている三国志とは違うのだから。

俺の知っている零里こと司馬懿は俺の世界では男として描かれているのだ。だからこの時点で女の子である零里が、俺の知っていた司馬懿とは違うので俺の知っている三国志の世界とは違うのだろう。

と言う事は俺は、「自分の住んでいた時代から単純にタイムスリップをした」と言う事ではなく、「自分の世界とは違う世界に飛んでしまった」ようだ。

………うん、一応考えてみたけれどやっぱりまだ分からない事だらけだ。

そもそもどうして俺が選ばれたのか………どうして違う世界に飛んだのか………どうして三国志に登場する司馬懿がどうして可愛い女の子なのか………これから俺はどうすればいいのか………そして俺は元の世界に帰る事が出来るのだろうか

はつきり言わせてもらって、分からない事が多すぎて挙げ出したらきりが無い。そんな不安や疑問ばかりのこの世界の中で、俺は零里と初めて出会った。………そして、零里の口から告げられたこの世界の真実。………そして、目の前に存在する救いを求める街の人達。

その人達が俺の事を『天の御遣い』とか言う、訳の分からない物として見ている。その目には希望の光がこもっていた気がした。

だけど、俺にはこの人達が望んでいるような大層な人間じゃない。強さで言ったら、剣道部に所属していたとは言え………零里と比べた

ら、全く話にならないだろうし……頭の良さでも、当然足元には及ばないだろう。

……そんな俺を『生きる希望』として、この人達は見ている。

（こんなにも多くの人が……こんな俺に救いを求めている……）

確かに今の俺は、何にも力を持たない弱い人間なのだ。でも……

（弱いままで人生を終わらせたくは無いはずだ。俺も、零里も……この街の人だって）

一つだけでは、何の力も無い『種子』も『自然の力』があれば、立派な『花』を咲かせる事が出来る。今の街の人や俺は、その『種子』なのだろう。そこに零里と言う『自然の力』が加われば、立派な平和と言う『花』を咲かせる事が出来るはずだ。

「（俺もその『花』を咲かせる為にも、今は目の前の事を解決しよう！）……皆、聞いてくれ！」

俺は出来る限りの大声で言った。……その声を聞き、街の人達が俺に注目する。

「俺が皆の言う、天の世界から舞い降りた北郷一刀だ。だけど俺は皆の臨んでいるような力は全く無い。……だけど、皆の平和を守っていききたいと言う気持ちがある。皆は逃げる事を考えていたようだけど、それではいつまで経っても平和なんて訪れはしない！……逃げた事に成功はしても、またすぐに賊たちは皆の事を襲ってくる……だったら戦って、守り抜けばいい。自分から突き破って行かなければ、何も変わりはないんだ！！『人』って言うものはいずれ

必ず死ぬんだ。どうせ死ぬんなら、誇りも何もかもを捨てて逃げ延びて寿命を迎える様な事はしないで、誇りを胸に込めて大切な物を守って早死にするんだ!!そして、皆には司馬懿が……『神』が居るんだ。だから何も恐れる必要なんて無いんだ!!……だから皆の大切な物を守るために、俺と零里に……皆の命を預けてくれ!!」

俺がそこまで言つと、街の皆は一斉に静まり返り、そして……

「「「おおおおおおお!!!!!!!!」」」

街の皆が一斉に叫んだ。

〈SIDE OUT〉

「御使い様の言う通りだ!!俺達は誇りをかけて街を守っていけばいいんだ!!」

「こんな所で逃げていたんじゃ、いつまで経っても俺達は助からないんだ。……だったらこっちから目に見せてやろうぜ!!」

「俺、鎌とか鍬とかを持ってくるよ。そんなんでもいいんだろっ。」

街の皆さんが結託をして一斉に行動を起こしました。……やっぱり一刀様はすごいです。一言で皆さんをこんなにも動かすなんて。

「ふう……」

一刀様はそう言つて肩の力を抜きました。どうやら疲れたみたいで

すね。……私は即座に駆けつけました。

「お疲れ様です、一刀様。」

私がそう言つと一刀様が振り向いてくれました。……ああ、やっぱり一刀様はかっこいいです／＼

「ああ、零里。……なれない事をしてちよつと疲れちゃったよ。」

そう言つて一刀様は首を回していました。

「そんな事ないですよ。この街の人達がこうして戦う事を決めてくれたのも、全部一刀様の素晴らしい演説のおかげですよ。」

「よ、よしてよ……照れくさいじゃないか／＼」

私が評価をしたら、一刀様は照れくさそうに俯きました。……はあ……やっぱり、一刀様はかわいいです／＼／＼

「でも、これからが大変なんだよな。……零里、これからも俺の事を支えてくれよ。」

一刀様が真剣な顔つきになられたので、私はすぐに平常心を取り戻しました。

「……もちろんです……一刀様と私の夢のために、ずっと貴方を支えていきます。」

一刀様と私の夢……民の皆さんの平和を築くため。

そして、私の復讐を遂げる為に……

そう思いながら、私と一刀様は街の人達の準備を待ちました。

## 第5話（後書き）

「後書きコーナー」

はい、という訳で今回の第5話はいかがだったでしょうか？作者の  
マツトと、アシスタントの零里さんです。

零里「……はあ〜」

あ、あのお〜零里さん？……どうしてそんな深いため息を吐いてい  
るんですか？

零里「あ、マツトさん。いえ、前書きでも書いてあったように貴方  
には文才が無いと思って……」

ウツ！？（グサツ！）……た、確かにそうかもしれませんが、ど  
うしてそんな風に思うんですか？

零里「どうしてあんな中途半端な終わり方なんですか？もうちょっ  
と頑張ろうとかしなかったんですか？」

い、いや……自分的にはこの方がきりが良いと思ひまして……

零里「……やっぱり『お仕置き』が必要でしょうか？」

エエエエエ！！？なんでそうなるんですか！？

零里「だって、こんな風に区切りをつけていたら、いつまで経って  
も私と一刀様の拠点が完成しないじゃないですか。」

た、たったそれだけで『お仕置き』なんですか!?

零里「それだけと言う問題ではありません!! 私と一刀様の愛をはぶくむ為には、拠点を書いて一気にラブラブにならなくてはいいないんです!!」

わ、分かりました。頑張りますから……だから『お仕置き』は勘弁をしてください。

零里「……お願いしますよ。もし嘘であれば……分かってますよね  
♪(ニコッ)」

は、はいいいいい!! 分かりました!! (ビシッ)

零里「はい。……さて次回は、いよいよ戦闘の話になるのでしょうか?」

はい……でも、自分の苦手としている戦闘シーンなので、全く自信が無いです。……最悪の場合、更新が遅れてしまいかもしれません。

零里「……………」

れ、零里さん? またどうして急に黙るのですか?

零里「更新が遅れるって、どう言う事ですか? きつちりお話を聞かせてくださいね♪(ニコニコ)」

ヒッ!? ……あ、あのおゝ戦闘シーンは、私の苦手分野なのでそれでちょっとだけ遅れちゃうかもと、思ってた。

零里「そうですかぁ……そう言う理由なんですかぁ……だった  
ら解決策がありますよぉ」(ニコニコ)

な、何ですか？

零里「簡単ですよぉ……マツトさんが、昼夜休まずに書いてくれ  
ればいいだけの事じゃないですかぁ」(ニコニコ)

ちよっ！？それ死んじゃいますから！？

零里「…ウルサイ、ツベコバイワズニ、ヤレ……」

こ、恐い！？だ、誰か、たすk……………

ザー……………

……その後、マツトの姿を見た者は誰も居なかった……

## 第6話（前書き）

すみません。前後書きに戦闘になると書いていましたが、今回戦闘の場面はありません。

## 第6話

私達がお互いを支えあう事を確認した後に、街の皆さんがそれぞれ農具や作りだされた弓を持ってきました。

これから戦争が起きる……その事は今になってもやっぱり恐いです。人が人を殺していく……そんな事はあつてはいけない事です。

でも、そんな事に怯えていたら何も出来ずに終わってしまいます。

……それに、こんな事を言ったら、私の復讐も達成出来ずに終わっちゃいます。

……結局私は、自分の目的の為に街の皆さんを騙して、戦争を引き起こしています。……こんな私は最悪の人間となるでしょう……

でも……それでも私は、もう後には戻りません。一刀様と共に歩んで、一刀様の愛を一身に受け止めて、一刀様を奪っていった女達に復讐をします。

「んっ？零里、一体どうしたんだ？」

「……えっ？」

振り向いて見ると、一刀様が声を掛けてきました。

「あ、あの一刀様？どうして私の事を心配なさったのですか？」

私がそう聞いたら一刀様が……

「いや、だって……何だか零里、凄く思いつめた感じの顔をしていたから……あっ！もしかしてこれからの戦争の事を気にしてるのか？」

と、仰ってきました。どうやら、思っていた事が顔に出ちゃったようです。

「心配は要りませんよ。相手はまともな統率も取れない烏合の衆の賊軍ですから、今の私達の敵じゃありません。……その代わり、一刀様はなるべく前線に出ないで私の側に居てくださいね。」

私は戦争の事を気にしていた一刀様に、私の側に居るように伝えます。そして……

「この軍は、一刀様を中心に構成されていると言っても過言ではありません。……だから要の一刀様がやられてしまったら、軍が総崩れになってしまいます。……それに私は、一刀様に死んでほしくないのです。」

……と、さりげなく告白をしました。

「うん。それはもちろん分かってるよ……俺なんかが前に出ても、皆の足手まといになるだけだろうし、男としては情けないけれど、零里の側に居させてもらうよ……だけど零里、俺と一つだけ約束をしてくれ。」

「はい？」

一刀様は私と共に居ることを、承諾なさったようですけど、私として欲しい約束があるようで私は首を傾げました。

「俺を守るのはいいけれど、零里……お前も死なないで生き残ってくれ。俺は……『好きな子』に死んでほしくはないから。」

「……はへっ！？／／／」

い、いいいいい今、一刀様はなんて／／／……『好きな人』………そ、そそそんな、大胆な告白を／／／

「は、はわわわわわ／／／」

もう私はどうしたらいいのかわからずに、「はわわ」とうろたえてしまいました。

「あ、いやその／／／……ほ、ほら零里は、一番に俺の事を見つけてくれたから……その／／／……そ、それに零里だって、この軍の要なんだから死んでもらっちゃ困るから……だから、その／／／」

一刀様が何やら呟いていましたが、私の耳には殆ど入っていませんでした。……と、そんな時に、

「……いやあく見せてくれますね、御遣い様も。」

突然、一刀様とは違う方向から声が聞こえてきました。

その方向を見ると、街の皆さんがニヤニヤしながら私達の事を見ていました。

「なっ！？／＼こ、これはその……」

一刀様は何かを言いたそうに呟いていましたけど、街の人達は表情を変えないで……

「いやいや、御遣い様と司馬懿様がお似合いなのは此処に居る奴らは皆知ってますから。」

「けどそうゆう事は、せめて賊の退治を済ませてからお願いしますね。」

なんて言われてしまいました。……うう、恥ずかしいです／＼／＼それに私と一刀様がお似合いなんて……はふう／＼／＼

「そ、そうですよね！！こんな事はこんな時にする事じゃありませんからね！！」

私はこの状況から早く逃げ出したかったので強引に話を終わらせました。

「そ、そうだよな！！これから俺達は戦わないといけないのに……」

一刀様もこの場の空気を変えようと、話をつなげました。

でも、この戦いが終わったら……／＼／

……

「……はあ」

私はついつい深い溜め息を吐いてしまいました。街の人達から私達の事をからかわれて、一刀様と一緒に弁解をしたんですけれど、その姿を見た街の人達に……

「やつぱりお似合いだわ」 「照れなくてもいいでしょ」

なんて言われて、ますますからかわれる始末でした。……はう、すつごく恥ずかしかったです／＼

その後何とか皆さんの事を、鎮め（？）ることが出来、そして今は皆さんを連れて行軍中です。

…… どうでも良い事ですけれど、こんな談笑をしていたのに何故賊たちは街を襲おうとしなかったんですようか？あの時の私達は、すつごく油断をしていたと言うのに…… まあ、そんな事も分からないような人達なんでしょうけど。

…… だって賊と言うのはおそらく、私が前に殺したクズ三人組の仲間なのでしよう。あんな頭の悪いクズ達の仲間ですから、その仲間達も頭の使えないクズ達なのでしようから、こんな絶好の機会も見逃してしまうのでしよう。けれど、そんなクズ達が相手ですから私は余裕で勝てるんでしょうけれど。…… まあ例え、万が一襲ってきたとしても、私一人で賊は一掃できるんですが。…… そんなクズで哀れな賊達の事を考えると……

「……はあ」

また溜め息を吐いてしまいました。

「ん？どうしたんだ零里、溜め息なんか吐いたりして……」

私が溜め息を吐いていた事に気付いて心配してくれたのでしょうか、一刀様は私に聞いてきました。

「あつ、いえ……ただ、これから討伐をする賊の軍団が余りにも鈍重な動き方をするので、もうただの『馬鹿でクズの集まり』だと私には思えてしまつて、呆れて溜め息が出てしまつたんです。」

私は思っていた事を、正直に一刀様に伝えました。……こんな事を隠しておいても、別にどうと言う事は無いでしょう。

「そ、そうなんだ……じゃあそんな賊に対してなんだけど、零里は策とかは考えているの？」

一刀様は少々、身を引きながら策があるかと聞いてきました。……なんでそんなに身を引く必要があるんですか？

「そうですね……基本的には、それぞれ二人一組になって賊を攻撃します。……若い男の人には、槍兵として前線で奮闘をしてもらつて、お年寄りの人達は弓を用いて後方にて援護射撃をしてもらいます。こんな感じに当たったら、自然と賊軍の前線は崩れ去るでしょう。」

「えっ！？そ、そんな簡単な策で大丈夫なのか？」

私は取るべき戦略を簡潔に教えたら、一刀様は策の内容が簡単すぎる事に驚いていらつしゃいました。

「心配要りませんよ。相手はろくに統率も取れないで数を頼りに進

んでいくようなクズ達です。そんな相手には、そう言った初歩の初歩くらいで十分なんですよ。……と言うより、そんなクズを相手に正当な兵法を用いる事自体が馬鹿らしいんですよ。」

「そ、そうなんだ……」

一刀様に思っていた事を打ち明けたら、一刀様は理解をしてくださったようです。

「ですがそんなクズが相手でも、一刀様の身に危険が全く無いとも言えないので一刀様は、本陣に必ず居てくださいね。」

私は一刀様の心配をして、そう忠告しました。

「ああ。本当だったら俺も皆と一緒に戦う事が一番いいのかもしれないけど、俺にはそんな力は無いから、素直に安全な所に居させてもらうよ。」

一刀様も素直に忠告に応じてくれました。事実一刀様は、今の私と比べたら全然相手にもならない程弱いです。……でも、それでもいいのです。私は一刀様をお守りをして、愛していければいいのですから。……でも、私の事を守ってくれる一刀様って言うのも……  
… / / /

「えっと……零里、どうしたんだ？」

「…へっ！？ / / /」

突然一刀様の声が聞こえてきて、私の声がひっくり返ってしまいました。

「な、なななんでもないでしゅよ！！／／／」

まさか一刀様が、私の事を守ってくれた時の事を想像していて、顔を赤くしていたなんてとても言えずに、思わず舌を噛みながら答えてしまいました。

するとそんな時に……

「御遣い様、司馬懿様。賊が見えてきました！！」

男性の一人が、賊の部隊を確認した事を伝える声が聞こえてきました。

「あつ、そろそろ敵が見えてきたみたいですね！！そろそろ戦闘態勢を取りましようか、一刀様！！」

私は、少々強引に話題を変えて一刀様に戦闘態勢を取る事を助言しました。

「えっ、ああ……うん、そうだね。じゃあ零里……前線部隊の指揮を任せる事になるけど、よろしくね。」

一刀様は話を変えられた事に戸惑いながらも、私に指揮を任せてくれました。そんな一刀様に私は……

「御意です♪」

と、笑顔で言いました。

## 第6話（後書き）

（後書きコーナー）

零里「はあ……」

零里さん、その……あの……

零里「はあ……」

すみませんでした！！

零里「ああ、マットさん。……どうして謝るんですか？」

いや、だって……戦闘場面を書く事を出来なくて……

零里「ああ、そんな事は私は気にしていませんよ。」

あつ、そうだったんですか。……じゃあ、なんで溜め息を？

零里「いえ、前の話の後書きでは『戦闘がある』と書いたのに今回の話では書かなかったら、不評が出てしまっんでは無いでしょうか？」

た、確かにそうですね。……でも、さすがに次回は絶対に戦闘を書きますから。

零里「まあこれで次回、戦闘を書かなかったら……貴方はクズですからね。」

ウグツ!!……が、頑張りますよ。

零里「まあ、貴方がクズになるかは置いておいて、こんなマトさんが書いている小説ですけど感想はいつでも待っていますので、ぜひとも書いてくださいね。」

よろしくお願いします。

## 第7話（前書き）

中途半端な区切りになってしまいましたが、ご覧ください。

## 第7話

『うおおおおおおおおお！！！！』

一刀様とのお話の時間もすぐに終わってしまい、私は部隊の指揮を執ってクズの賊軍と対峙をしていました。

基本的な当たり方は「前衛部隊が常に二人一組となり、賊軍をけん制しつつ、後方の弓部隊が援護射撃を行って賊軍を壊滅させる」と言う、非常に簡単な当たり方です。……まあ、クズの賊軍を相手に兵法と言うのが一番の理由だったのですけど……

『うおおおおお！！死ねえええええ！！』

『こんな所で死ねるかよおおおおお！！』

……どうして戦の最中なのに、こんな掛け声が飛び交うのでしょうか？まるつきり子供の喧嘩じゃないですか……

まあ、そんな事よりも……

（一刀様は大丈夫でしょうか……）

私は、本陣に居るはずの一刀様の事が気になって仕方ありません。

（ちゃんと私の事を待っていてくれるのでしょうか？賊に襲われたりなんてしてないでしょうか？……！！？そ、そうやってしまったら私は……私は……い、今からでも行って一刀様の様子をみてきましようか？で、でもそんな事したら一刀様はきっと私の

事を『あつかましい女』だと思われてしまつかもしれません。ああ、でも私は……」

私が本陣に戻るかどうかを考えていると……

「おお！！こんな所にいい女を発見！！」

何処から湧いて出てきたのか、賊の格好をしたクズ達が私を取り囲んでいました……今、私はすごく悩んでいるのに、このクズ達は……と言うより、部隊の人達は一体何をしていたんでしょうか？

「野郎ども、今日はこの姉ちゃん楽しんでむぞ！！かかれっ！！」

「「「おおおおおお！！」」」

……こう言うクズ達はこんな事しか頭に無い馬鹿なんですよね。仕方がありません、私が『お仕置き』しましょうか。

「邪魔です……閃空衝裂波！！」

私は回転をしながら剣圧でクズ達を浮かし、浮き上がったクズ達に追い討ちを仕掛けました。当然ながらクズ達はあっという間に力尽きました。……あっけなさ過ぎです。

「……こんなにあっさりとクズが進入をしてくるなんて、本当に部隊の人達は何をしているんでしょう。でも、この様子じゃ一刀様が居る本陣も……もしかしたら……」

私は一瞬、不安を感じて一刀様の居ると思われる方向に意識を集中しました。

「……………！！絶風刃！！」

一刀様の辺りから良からぬ気を感じた私は、剣戟を高速で重ねて生み出した絶風の衝撃波を一刀様の方向に向けて（もちろん、微妙に位置をずらして）発射しました。

「誰か、誰か居ませんか！？」

私はすぐさま誰か居ないかと叫びました。すると一人の男性がやって来ました。

「へい、司馬懿様……………どうしたんですか？」

私は男の態度に少々苛立ちましたけど、今はそんな事を気にしている場合ではありませんでした。

「本陣の方向から妙な気配を感じました。敵軍の伏兵の可能性があるので私は単身で一旦、本陣に合流して一刀様の護衛に当たってきます。」

私は男に状況を説明すると、男はキョトンとした表情を浮かべて、こう言いました。

「へっ？……………いや、司馬懿様……………それなら俺達は一体、どうすればいいんですか？」

そんな男に私は平然な顔で言いました。

「貴方達は基本方針に従って賊を殲滅してください。それで、皆さ

んに必ず勝機が訪れます。」

「い……いや、でも、どうせ戻るんでしたら……俺達も一緒に……  
(チャキ)……!? ヒ、ヒイイ!？」

男が小さくブツブツと呟いている時に、私は剣を男の首元に近付けます。……少し、教訓してあげましょうか……

「……つべこべと言わずに、貴方達は私の指示通りに動いていればいいんです。……それと貴方、私に対して馴れ馴れしく話しかけないでください。今度、そんな風に話したらその時点で貴方の首を刎ねますからね。……それに、私の所にまで賊の侵入を許してしまう貴方達のような、役立たずを連れていた所で邪魔になるのは確定的なんですから。そんな役立たず達を、わざわざこちらは使っているのですから役立たずは役立たずらしい功績を挙げればいいんです。……あつ、だからと言って本当に役に立たずに、私や一刀様を失望させるような結果であつたら……貴方に責任を取ってもらいますからね。」

私は思っていた事を、男にそのまま伝えたと……

「は、はいっ!! りよ、了解致しました!!」

と、男は顔を引きつりながら大声で言いました。

「……………それじゃあ、後はお任せしますね。」

「はっ!! 必ず、ご期待に応えてみせます!!」

私は男に指揮を任せて一刀様の所に向かいました。……あんな風に

すぐに態度を変えるなんて、教訓は成功ですね。

「テメエ等！！死にもの狂いで戦うんだ！！司馬懿様と御遣い様の……俺達の勝利の為に……賊徒狩りじゃああああああ！！！！」

……何だか、ちょっと変わり過ぎたかもしれません。

〈一刀SIDE〉

零里が部隊を率いて賊軍に攻撃を仕掛けた後、俺は零里の言葉の通りに本陣の指揮を取っていた。

正直に言っただけ俺はどうしたらいいのかと、戸惑っている。……今まで平和な国で暮らしていた俺の周りではニュースの中でしかありえなかった人殺し。……それが今、俺の目の前で起こっている。……それも『戦争』と言う大規模の物だ。

（ウツ……）

見ているだけでも吐き気がする。この世界の人達だって、きっと幸せな一生を送りたかったはずだ。……でも、それも叶わない夢だ。

『弱者が強者に殺される。』……この世界ではそれが当たり前前の掟なのだ。

……俺の立場は間違いなく『弱者』だろう。一人では生きていくような事も、ろくに出来ない。そう考えたら、今戦っている街の皆の

方が間違いなく『強者』だろう……

そんな俺を、皆は『天の御遣い』だなんて言っ  
て、主とあがんだ。  
……そして零里も。

……だから俺は決心をした。

（絶対に……強くなってみせる！！皆を……零里を守れるくらいに  
！！）

そう決心をした直後だった……

『『『『ワアアアアアアアア！！！！！！』』』』

突然、本陣の後ろの方から叫び声が聞こえてきた。

「ど、どうしたんだ！？」

俺は突然の事に驚いて、何があつたかを知ろうとした。すると、男  
の人が現れた。

「み、御遣い様、逃げてください！！……後方に、ぞ、賊軍の……  
伏兵が……（ザシュッ！）……ア！？……アガッ！？」（バタッ）

男の人は俺に逃げる事を伝えようとした時、男の人の左胸から槍の  
穂先が突き出て倒れた。……そしてその後ろには、槍を刺した男を  
含めた、二十人ぐらいの賊が居た。

「へへっ……『御遣い様』って事は、お前が大将の『天の御遣い』  
って奴か……へへっ、確かに良い服を着てやがる。」

賊の一人が確認をするかの様に、言葉を放つ。その後、すぐさまその横に居た賊も口を開く。

「んじゃあ、早速で悪いが……お前には死んでもらおうか。」

槍を持った賊が、穂先を俺に向けてきた。

「ま、待ってくれ!!……あんた達は何が目的で、街を襲うんだよ。せめてそのくらいは聞いてもいいだろう!!」

俺は何とか、賊達の気を逸らそうとして、賊達に話しかける。

「へっ……そんなの決まってるだろ。お前達にやられた仲間の仇討ちさ。」

賊のリーダーのような風格の男がそう言った。しかし……

「な、何だよそれ……俺、そんなの知らないぞ。」

そっ……そんな話、俺は初めて知った。賊達の仲間がやられたって言うが、俺は賊に襲われた事なんて一度も無い。

すると男は、また口を開いた。

「……まあ、お前は覚えがなくて当然だろうな。聞いた話ではお前は気を失っていたみたいだったしな……それに、仲間を殺したのは『女』だって話だしな。」

『女』……その言葉に、少々の不安を感じた。

「ちょ、ちょっと待て。……その『女』の特徴は!？」

俺は、居ても立っても居られなくなって、男に特徴を聞き出した。

「ああ?……確か『黒くて長い髪に、見るからに小さい服を着た、胸のデカい女』だ。」

男の言った特徴を聞いた俺は、その『女』に見覚えがあった。

……間違いなく……『零里』だ。

俺がどう言う事が、考えていると痺れを切らした槍を持った賊が……

「……そんな事は、お前にはもう関係の無い事なんだよ!! さつさと俺にやられてくたばっちまいな!!」

そう言っただけに突進してくる。

(!!……くそっ!! せつかく、強くなるって決めたばかりなのに、こんな所で終わるのかよ……)

俺が、自分がやられるのを覚悟していると……

ビュユウウウン!!……

「へっ？……！？ギヤアアアア………」

突然、×の形をした衝撃波が、賊を巻き込んで通過した。その後……

「かあああああずうううううとおおおおさあああああああああ……！」

聞いた事のある叫び声が聞こえてきた。

「……！？零里……！」

俺は思わず零里の名前を叫んだ。

「大丈夫ですか！？怪我はありませんか！？お腹はすいてませんか！？私の事は愛していますか！？」

……何だか関係ない事も聞かれている感じがするけど、何か返事をしないといけない気がしたので……

「あ、ああ……大丈夫、だよ。」

と、答えた。

「♪良かったです。本当に良かったですぅ………」（だきっ）

返事を聞いた零里は、俺に抱きついて来た。む、胸が……当たってる！？

「ちょ、ちょっと零里！？……あ、あの離れて……くれないか？」

俺は慌てて零里に離れるように指示をするが、零里は俺の胸に顔を埋めたまま離れようとはしなかった。

「嫌、です！私……一刀様の事が心配で心配で、仕方が無かったですよー！」

そうして上げた顔には、涙の痕が残っていた。だけど……

「おい！！俺達の事を無視してんじゃねえ！！」

……今は賊達と対峙している最中なので、当然、無視をされて目の前でイチャついてたのを見た賊は怒り出す。しかし零里は……

「でも、一刀様……ご安心ください。これからは私が護衛をしますからね。」

賊達には見向きもせず、俺の事だけにかまっていた。その光景を見た賊は……

「おい！！いい加減にしゃがれ！！……ああ、もういい！！野郎共、こいつ等をぶっ殺せ！！」

リーダーが、他の賊に俺達を襲わせた。すると零里は小さな声で……

「（一刀様……私の側から離れないでください……）」

と、呟いた。

そして俺は、言われる通りに零里の側に近づくと……

「地に眠りし聖なる光よ……我と愛する者を守りたまえ。……ハア  
アアアアア！！守護方陣！！」

零里は地面に剣を刺した。すると同時に、俺と零里を中心に直径三メートルの円が現れて、そこから光が溢れ出した。

「……うわあああああ！！」「……」

光に触れた賊達は悲鳴を上げながら倒れた。

「なっ！？どうしたんだよ！？」

賊のリーダーは、一体何が起こったのか分からずに困惑していた。  
そんなリーダーに零里は……

「私と一刀様の時間を邪魔をしないでください。……貴方のような  
クズは、愛する人と言う者が居ないから襲ったに決まってるでしょ  
うけれど、私と一刀様の恋路を邪魔をする様なクズには私が直々に  
『お仕置き』をしてあげます。」

リーダーに向かって怒りの表情を露にした。

「う、うるせえ！！お前は、前に俺の仲間を三人殺しやがったんだ。  
そして、今も俺の仲間をやりやがった。だからてめえは仲間の仇！  
！てめえは俺が殺す！！」

リーダーは、あくまで零里を自分の仲間の仇だと、言い張る。そんな態度に力チンと来た俺はリーダーに対して、「零里はそんな事はやっていない。」と反論しようとしたが……

「……だからどうしたって言うんです？」

零里が先に言葉を発した。……えっ？この言い方からして、まさか

……

「……あの時のクス達は、一刀様を殺そうとした上に私の体を見て嫌らしい事を考えてたんですよ。……そんな無礼なクスに一瞬で判断しましたよ。『このクス達は生きる資格はない』って。」

零里はリーダーの言葉を否定をせずに、自分から賊の仲間を殺した事を申告した。

……そんな、零里が………賊を殺したなんて……

「それにさっきから貴方………仲間の事を大切に思っている様な言い方をしていますけど、だったらどうして最初に仲間を私に襲わせたんですか？本当に仲間の仇を討ちたいのだったら、死にもの狂いで立ち向かうものでしょう。」

「そ、それは………てめえの力がどれ程か見るために………」

「果たしてそうでしょうか？………仲間が殺された事を聞いたのであれば、その力はどれ程の事かってぐらいは聞いているはずですよ。それなのに貴方は『仲間私を襲わせて、力を見極めた。』………この時点で、貴方は私の力を聞いていない事が分かり、更に貴方は仲間を『自分の為の道具』の様な扱いをした事から、貴方は『仲間の事を大切に扱っていないクス』だと言う事が確定しました。」

「ウッ！？………」

零里に凶星をつかれて、賊は一瞬たじろぐ。

「う……うるせえ！！うるせえ！！俺はクズじゃねえ！！本当にクズなのは、俺の何の役にも立たなかったこいつ等と、てめえ等なんだよ！！うおおおおおおお！！」

賊はそう言って開き直って、零里に剣を振り下ろした。

しかし……

「……フッ！！」

零里は難なく賊の剣を受け流して、賊の体を自分の剣を斬りさいた。

「……自分がクズである事を自覚せずに、開き直って他人の事をクズ呼ばわりする時点で、もう貴方はそれ以下の存在です。」

零里は賊の死体に向かってそう言い放った。

「……………」

俺は零里と、賊のリーダーを交互に見つめた。事実俺も、こいつはクズ以下の存在だと思った。……しかしそんな事はどうでもいい……本当に重要な事は。

「……零里。」

「何でしょうか、一刀様？」

俺が知りたい事は……

「……嘘偽り無く、全ての事を、俺に教えてほしい。」

## 第7話（後書き）

（後書きコーナー）

はい、作者のマットです。……さて、第7話はいかがだったでしょうか？

零里「……中途半端ですね。」

零里さん、それは私も分かっています。話の展開はどうだったかって事ですよ。

零里「何だか一刀様が、私に対して疑い始めたようですね。」

はい。……一刀は、賊のリーダーから聞いた話の内容と零里さんから聞いた話の内容に疑問を持って、零里さんの正体を疑ってききました。

零里「一刀様はあんなクズ以下の言葉なんて、真に受けないはずですよ！！」

……さあ、果たして零里さんは疑問を抱いた一刀に、本当の事を明かしてしまうのでしょうか？……それは、次回明らかに！！

零里「な、何なんですかそのアニメのような終わらせかたは！？……そもそも、そんな事したら、きっと一刀様は……」

あ、あと……感想を待っていますので、よろしくお願いします。

零里「聞いてくださああい!!??」

## 第8話（前書き）

何とか書き上げました。

後、ちょっと久しぶりにあの二人も現れます。

## 第8話

「君の全てを、嘘偽り無く教えて欲しい。」

-----

一刀様の言葉を聞いて、私は一瞬だけ時間が止まったように感じました。

『私の事を全てを嘘偽り無く知りたい』……私の聞き違いで無ければ、そんな言葉が聞こえてきました。

「ちょ、ちよつと待ってください……一刀様、貴方は一体何のお話をしているのですか？」

私がとぼけてみても……

「とぼけないでくれ、零里。……俺は真剣に聞いてるんだ。」

一刀様の眼は、真剣な眼差しをしていました。……それでも私は、正体を明かす訳にはいきません。だってそんな事をしたら、一刀様は……

「い、一体何を……「零里……」……!!?」

私がまた、とぼけようとしたら一刀様が怒鳴ってきて、私は驚いてしまいました。

「さっき言ったはずだろう!!とぼけずに全てを、俺に教えろって

「！！……これ以上とぼけるって言うなら、俺はお前の事を『嫌いになるぞ。』」

「！！！？？」

……『嫌いになる』……一刀様が……私を……

……イヤダ。

……また、一刀様が……私を……愛してくれなくなる……

そんなの、絶対に……イヤ……

「い、嫌……嫌いに……私を、嫌いに、ならないで……ください、い。」

私は涙を流しました。

……一刀様に愛してもらえない。

その経験を、私は800億回も味わいました。

私……もう……どうしたらいいか……分かりません……

嫌われないようにするには、一刀様に全てをお話しなければいけません。……でも、そうしたら一刀様は、私の事を『嘘つき』として嫌ってしまつでしょう。

……話しても地獄、話さなくても地獄。

私にとっては、一刀様に嫌われる事が何よりの地獄と感じられました。

……そんな事を考えていたら、突然、何か暖かい物に包まれました。

「……大丈夫だよ。」

「……へっ？」

包んでいた物の上から、一刀様の声が聞こえてきました。

……どうやら私を包んでいたのは一刀様のようでした。………てっ、一刀様！？

「あ、ああああの、あの……か、か、一刀様！？な、何を／＼／」

私が抱きついてきた理由を、聞きだそうしたら、一刀様が口を開きました。

「安心して……ちゃんと正直に話してくれたら、俺は零里の事を嫌ったりなんてしないから。……むしろ、本当の零里を知る事が出来るから、もっと君の事が好きになれるよ。」

「………あっ」

………そうです………一刀様はこんな事を正直に話したところで嫌いになったりはしません。

その事は私だって分かっていたはずでした。……でも私は、『嫌いになる』と言葉に過剰に反応してしまって、勝手に悪い方向に話を持っていつてしまいました。……それがいけなかったんです。そんな事をしたら、一刀様も嫌いになってしまいますよね。

「……分かりました……全てを正直に貴方にお話をします。……その代わり、私の事を……嫌いになったり、引いたりしないでくださいね。」

私はそんな心配は必要ない事が分かっているながらも、念を押して聞きました。

「勿論さ！！どんな事があっても、君の事を拒絶したりなんてしないさ！！」

一刀様は笑顔で仰ってくださいました。

「ありがとうございます。では、まず始めに……」

そう言つて、私は全てを話しました。

私がこの世界の人間では無い事……

私が、別の世界で一刀様に会って恋をした事……

一刀様が、別の女を最終的に選び、消えていった事……

左慈さんと于吉さんの事……

正史と外史の事……

この外史にも存在している『諸葛亮孔明』であつて、『司馬懿仲達』  
と言う偽名を使い、姿を変えてこの外史にやって来た事……

一刀様を、この外史に来た私の側に現れるように仕込んだ事……

私が殺したクズ達の事……

……そして、一刀様を奪つていった女達に対して復讐をする事……

ありのままに、全てを話しました。

「……以上が本当のことです。」

「……………」

私が本当の事を話したら、一刀様はずっと黙つたままでした。

……やっぱり、さっきは大丈夫と言つても正直驚いているのです  
よね。何せ、私の身勝手な行いで戦争を引き起こしているの  
から。

と、そんな事を考えていると一刀様が……

「……ごめん、零里。」

いきなり私に頭をお下げになり謝りました。

「……えっ？……ど、どうして一刀様が謝られるのですか？」

私が謝られた理由も分からず、一刀様に聞きだしました。

「……だって、俺が別の世界で……えっと、外史って言うのか……  
その中で俺が、君の事を選んでいたら君はこんなに悲しい気持ちを  
抱かなくてもすんだってのに……ホントに……ごめん。」

一刀様はさらに深く頭を下げて、謝られました。

「そ、そんな……謝らないください。第一、貴方は私の愛してい  
た一刀様とは違うんですから、だから、頭をお上げに……」それで  
もだー!!」……!？」

私が一刀様に頭を上げるように言おうとすると、一刀様の声に遮ら  
れて私は驚きました。

「それでも……君の事を選ばなかったのは俺が悪いんだ。例え、俺  
が君が愛した『北郷一刀』じゃなくても、全ての『北郷一刀』を代  
表して謝らせてくれ!!」

「……………」。

私は正直、驚いてました。全てを打ち明けた上で尚、引かないどこ  
ろか、全ての『一刀様』を代表をしてまで謝ってきたのですから。

この時私は、こう思いました。

（ああ、この人を愛して良かった……）と。

私は、まだ頭を下げている一刀様の前まで歩き、そして、抱きつき  
ました。

「……ちよっ！？れ、零里／＼／」

一刀様は抱きつかれた事に驚いていらっしやいましたが、私は構わ  
ずに言葉を告げました。

「でしたら……私を選んでくれなかった分、私の事を愛してくださ  
い。」

私なりの……『愛の告白』を……

「ああ、勿論だ。」

……一刀様はそう言って、抱き返してくれました。

-----  
-----

それから、しばらくして私達の義勇軍が賊軍を殲滅する事に成功し  
ました。

主に私の奮闘によって軍の士気が上がり、賊軍が総崩れになった所

を一刀様の指揮の元、突撃命令が下されました。

結果は勿論、犠牲者は出ましたが、私達の完勝でした。……これほどの完勝は、朱里の時では無かったです。

……やっぱり愛の力は強いです!!

私達が意気揚々と街に凱旋したら、残っていた街の人達が私達の事を歓迎しました。そんな民衆を相手に一刀様は……

「……皆さん、ごめんなさい!!」

頭をお下げになって謝られました。この突然の行動に、私や街の人達が一刀様の行動に驚きました。

「み、御遣い様……どうして急に謝れるのですか？」

一人の街の人が一刀様に聞き出しました。

「『皆さんを守る』なんて言っておきながら、結局犠牲者も出してしまつて……犠牲になった人の家族や友人の皆さんに対して、どんな言葉で謝罪をしたらいいのか分からないんですけど……本当にごめんなさい!!」

一刀様はそう言つて、また頭を下げました。……一刀様は本当に優しい方なのですね。

……ここは私が、頑張らないと!!

「……一刀様、頭を上げてください。そして……見てください。……

…この街の人の中で、一体誰が一刀様の事を憎んでいるような顔を  
してるんですか？」

「…………えっ？」

私の言葉を聞いた一刀様が、顔を上げました。……そして、私も街  
の人達の顔を見つめました。

……そこには、たくさんの笑顔が浮かんでいて、誰一人として、一  
刀様を憎らしく見ている人は居ませんでした。

「何を言ってるんですか、御遣い様！！…………あんたと司馬懿が居な  
かったら俺達は一生、賊達に怯えながら生活をしていたんだ。」

「そうだ！！…………それに、犠牲になった奴らだって自分達の愛する  
街を守って死んでいって、本望でしたでしょうよ。そんな気持ちを  
持たせてくれたのも、御遣いのおかげだ。」

「ああ、御遣い様と司馬懿様は私達に勇気をくれたんだ。」

「……御遣い様、ばんざーい！！」「……」

「……司馬懿様、ばんざーい！！」「……」

そんな街の人達の喝采を受けて、一刀様は目に涙を溜めていました。

（ふふっ、かわいいです。）

やがて喝采が止むと、一人の男の人がこう言いました。

「なあ、皆。御遣い様にこの街の県令になってもらったら、いいんじゃないか？」

「えっ……県令？……」

男の人の言葉を、一刀様は小さくつぶやきました。

「なあ、零里……県令って何？」

一刀様が県令の事について、聞いてきました。

「県令とは……平たく言えば、『街の長』という物です。……本来なら、朝廷から正式に任命をされて就き、その街の治安活動などをする役職なんですけど……でもどうして、一刀様を？」

私が県令について、簡単に説明をすると、一刀様に県令になる事を提案した男の人に理由を聞いてみました。

「……実は、御遣い様達が来る前に一度、この街が賊に襲われた事がありまして、その時赴任をしていた県令が、賊の襲撃にかまけて逃げたんですよ。」

「県令が……街を捨てたという事ですか？」

「……はい。」

男の人の言葉を聞いて、私は怒りを覚えました。

県令が逃げたという事は、その街を守るための軍事機関も停止したと言っても過言ではないので、そんな風にさっさと逃げてしまうよ

うなクズを赴任させるなんて、この外史の朝廷は腐っていると  
言ってもいいでしょうね。

「……県令が逃げたって言うのは、かなりマズイんじゃないのか？」

一刀様も、不安を感じているようでした。……私は県令が居なくなると起こる事を伝えると、一刀様の表情も怒りを露わにしました。

……怒っているお顔も素敵です／＼

「そうなんですよ！！だから、俺達はある奴を赴任させた朝廷をもう信じないんだ！！俺達の事をここまで思ってくれる御遣い様に、この街を治めて欲しいんだ。……だから、お願いします。俺達を導いてください！！」

男の人を始め、他の街の人が頭を下げました。

「え、えつと……零里、どうしよう？」

一刀様は、私に対して助けを求めました。……こ、困ったお顔もかわいいですう／＼／／

私は、一刀様の困っているお顔を見たい気持ちを抑えて、言いました。

「……この街から初めていきましよう……私達の夢の第一歩です。」

そうです、私と一刀様の夢……そして、私自身の復讐（ゆめ）への第一歩です。

「……分かった。皆の命を俺と零里に預けてくれ。……必ず、皆を守ってみせるから。」

一刀様がそう言う……

「「「「「ワアアアアアアアアアア！……！」」「」「」

街の人達の雄たけびが街中に響き渡りました。

（……やっぱり一刀様は凄いです。）

私は、一刀様を見て改めてそう思いました。

（管理者SIDE）

「……司馬懿が自らの素性を、北郷一刀に教えたようですね。」

于吉が、鏡を通して零里の様子を観察していた。

「クソッ……！……あんな奴に迫られた位で、素直にペラペラと何もかんでも喋りやがって……！」

左慈が苛立ち気に強く足踏みをする。

「……ですが、ここは我慢ですよ左慈。彼女の復讐心は幸いにも消えてはいません。……まだ、復讐をする事を諦めてはいないようですからね。」

「……分かっている。」

于吉に言われて、左慈も落ち着く。

「……もうしばらく傍観していきましょう。……我々が手を出すかは、彼女の行動次第なのですから。」

「チッ……事がうまく動いてくれればそれでいいがな……」

そう言って、二人の姿は闇の中へと消えていきました。

## 第8話（後書き）

「後書きコーナー」

さあ、いかがだったでしょうか？第8話は……今回も私、作者マツトとこの小説のヒロインの零里さんお送りします。

零里「はい。今回のテーマなんですけど、私が一刀様に自分の秘密を打ち明けました。……けど、一刀様はそんな私を愛してくれる事になって嬉しかったです。」

まさしく、ハッピーな感じでしょうか？

零里「はい。……まあ当然、こうゆう風にする予定だったんですよええ」（チャキ）

れ、零里さん……どうして剣を私に向けるんですか？

零里「いえ……もしマツトさんが、このお話の様な展開で無かったら首を落とそうかと考えていました……」

ヒイツ！？……も、勿論、そのつもりでしたよ。

零里「そうですねえ」。

（ヒヤッ）……さて今回、最後の方に于吉と左慈を出しました。

零里「……何だかいきなり、怪しい雰囲気でしたね。」

そうですね。彼らの目的はいずれまた、公開するつもりなので待っていてください。」

零里「そして今回は、もう一つあるみたいです。」

はい。『翠緑の天帝』さんから感想で、こんなお願いを書かれました。

「テイルズの技で、イノセント・シャインを入れてください。」

と、お願いをされまして……

零里「イノセント・シャインは確か、TOAのティアさんの秘奥義ですよ。」

はい、術系の秘奥義になります。実はちょっとこれで迷ってしまっただんです。

零里「どうしてですか？」

術と言いますか、カタカナ表記のされている特技とかは使用するか考えてたんですよ。……時代的にカタカナ表記されている技を使うのは、ちょっと抵抗がありました……

零里「でもそれは、何とかしないと一応お願いなんですから……」

は、はい。そこで皆さんにですね……出来たらいいんですけど、カタカナ表記がされた術や技をどのようにして使ったらいいか……感想と一緒にアドバイスをくれると助かります。

零里「私がそのまま使うとか……管理者の二人など、他の登場人物が使うとか……いろいろ、アイディアをください。」

さて、次回はいよいよ拠点を頑張って書いていこうかと思っています。

零里「ようやく、私と一刀様のラブラブな日々が描かれるんですね。

……ああ、楽しみですうゝ／＼／」

では、今回はこれでお開きにします。ご感想をよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4178v/>

---

恋姫†無双 ～私だけを見てください～

2011年12月9日16時00分発行